をするといふ風が漸く盛になつた。また一方には勢力も地位も無くていつも壓へ附けられてゐる者がある、此等の不平も漸く高まつて來た。然るにわが國の地位からいふと、斯樣な紛爭をしてゐては非常に不利な結果を見なければならぬのである。

本邦と朝鮮及び支那

その理由は、此の頃からわが國に眞の意味の外交が開けて來たことである。此の以前とても朝鮮との交通は常にあつて、學問技藝等凡てを朝鮮から學んだのであるが、彼は文化の程度に於て吾より遙に優れてゐたけれども、武力等の點に於てはさのみ恐るべきものでは無かつた。然るに今度は支那との交通が開けて來た。支那は久しく南北朝に分れてゐたのが隋によつて統一されて、隆々たる勢をもつて新にわが國との交通を開いて來たのである。元來朝鮮の學問や技藝は支那の模倣なのだから、その本家たる支那と交通をして直接に學んだ方が都合は勿論よろしい。その代りに支那は朝鮮と異つて兵力も強く、富の程度も遙かに上であるから、もしも敵になれば恐ろしい國である。依て之と交際をするに就ては充分用心をして、彼に乘ぜられぬやうにしなければならぬ、小さくても日本は侮れぬ國だといふ考へを持たせるやうにしなければならぬ。聖德太子が隋帝に答ふる書の中に、我國の天皇のことを『日出處之天子』と書して、敢て讓らぬといふ氣勢を示されたのも、その用意はこゝに在つたものと思はれる。斯ういふ時代であるから、國中のものが協力一致することの必要が痛切に感ぜられたわけである。太子は專ら此の目的のために佛法を弘められたものと思はれる。

天智天皇

是より以後隋が亡びて唐が起るに及んで、わが國との交通は益々盛になつた。此の間に於て朝鮮の問題について唐と衝突し、戰爭して負けた(天智天皇の二年)こともあつたが、我が國の實力は彼も認めて居たか

ら、此事の爲に我を輕侮するといふことは無かつたと見える。又我が國の方でも負けたからと云つて無闇に憤慨するだけでなく、その失敗の原因を實力の不足に歸し、彼の長所を學んで我が力を充實させるやうにするのが急務であるといふ所に氣がついて、盛に留學生を唐に送ることになつた。是は天智天皇をはじめ輔弼の任に在つた人々の聰明であつた爲で、まことに感服の外はない。無闇に强がるばかりが男ではない、爭ふべきことは死を以ても爭ふが、膝を折るべき場合には折れて出るといふのが眞の男である。

留學生

さて此の間に佛敎はいよ〳〵盛になつて、朝廷に於ても御尊信淺からぬやうになつた。これは決して天皇や親王家などが來世に極樂へ生れたいといふ思召で佛を御賴みになつたのでは無く、國家の隆昌を祈らんが爲に佛陀をたのみ、國民の平和を目的として佛法を保護せられ

皇室の御信仰

たのである。それで唐から多くの事を學ばねばならぬから、遣唐使をやる度毎に留學生や留學僧を送つたのである。此の留學僧は人選に深く意を用ゐ、有爲の人物をすぐり出して送つたのであるから、その成績も頗る見るべきものがあつた。僧侶と云つても世の中のことは全く知らずに只來世の事ばかり說くのでは無く、社會萬般の事に通曉し、學問識見はるかに朝廷百官の上に出た人が多かつたので、上下の尊敬を得たのも當然である。さうして此等の僧侶が唐に於て學んだことは、佛敎の敎理のみで無く、種々の方面に亘つて研究した所を齎し歸つて、わが國の文明を進める爲に貢獻を爲したのである。是より奈良朝を經て平安朝に至るまで、佛敎の隆盛と共に留學僧侶の數もます〳〵多くなり、唐の文物制度何くれとなく盛に輸入せられた。

當時の僧

中にも聖武天皇は光明皇后と共に非常に熱心なる佛敎の歸依者で

奈良の朝

居させられたので、彼の大佛の建立をはじめ多くの事業が計畫せられ皇后は佛の慈悲を學ぶの御心からして、慈善事業に力を盡された。僧侶の中には行基の如き大人物が居て、佛教を弘める爲に力を盡すのみならず、汎く社會の公益を進める爲に骨を折つた。例へば神龜三年に行基が山崎の橋を造つたといふことがある。その頃の事としては大工事であつたに相違ない、それを完成させたといふのを以ても行基の手腕はほゞ想像が出來る。今でも諸國に行基の遺跡と稱するものが澤山ある

僧行基

中には信用の出來ぬものも少くないが、兎に角此の高僧が諸國を行脚して人民の爲に益を計つたことは夥しいものであつたと見える。斯の如きは獨り行基のみで無い、僧侶が世間の信用を得たのは一面に斯る實際上の功績があつた爲である。天皇が佛に歸依して自ら『三寶の奴』と稱し給うたに就いて、後世の學者の中には非常に憤慨する人もあるが、それは天皇の御身として國家の隆昌を祈らせらるゝの叡慮から、佛に歸依して斯樣な禮までも盡されたのである。

傳教大師

斯の如く、此の時代に於ける佛教の信仰は主として現世的のものであつた。勿論僧侶の中には深い研究を積んだものもあつて、現世の利益のみを目的として教を立てた者ばかりでは無いが、その一般に信奉せらるゝ所は現世的の方面であつたのである。斯くして桓武天皇の延暦七年に至り、傳教大師が叡山を開き、その後唐へ渡つて天台を學び、歸朝したのは延暦二十四年のことである。日蓮上人の教は天台傳教の二師の教に基く所が多いから、此の年は上人の教を信ずる者に取つては大切な年である。これは聖德太子の憲法が出來た年から凡そ二百年の後である。傳教大師が叡山に道場を開いて法華經を講ぜらるゝに及んで、朝廷に於ても大に御尊信あつて、諸宗を盡く壓倒する勢となつたが、これ

鎭護國家

は叡山が『鎭護國家の道場』であつて、法華經の功德によつて皇室の御繁昌をも、國民の幸福をも進めることが出來ると信ぜられたが爲である。勿論傳敎大師の研究は天台宗の敎義の全體について廣く且深く行亘つてゐたのであるから、現世の事ばかりを主としたわけでは無いが、その當時に重んぜられた所以は專らこゝに在るのである。また大師は宗敎以外の事についても種々貢獻する所があつた。京都の御所の設計について大師の意見を徵せられたといふことさへ傳はつて居る。されば後年日蓮上人が。

夫れ國は法に依て昌へ、法は人に因て貴し。國亡び人滅せば佛をば誰か崇むべき、法をば誰か信ずべきや。先づ國家を祈りて須らく佛法を立つべし。――《立正安國論》

と申されたのは淵源する所遠いといはなければならぬ。傳敎大師歸朝の翌年には弘法大師が歸朝して、眞言の敎を弘め、是亦大なる勢力を作つた。傳敎にせよ、弘法にせよ、いづれも非凡な材幹の人で、大臣として國政を執らせても立派に任を全うして行ける力がある。ことに新歸朝者として種々新しい智識を齎らし來つたのであるから、如何なる大勢力をも作れた筈である。

暗黑面

佛敎の弘まつたに就いては斯る明るい方面があるばかりでなく、他に暗い方面のあつたことを忘れてはならぬ。僧侶とても佛の生れがはりのやうな人ばかりは無いから、漸く勢力を得來ると共に種々の弊害も生じた事と思はれる元正天皇の養老元年に朝廷より僧徒の濫惡を禁ぜられたことがある。光仁天皇の寶龜十年には僧尼を戒められたことがある。その外玄昉や道鏡のことは人のよく知る所である。又その敎を說き法を弘める仕方についても段々弊害が生じて來たものと思は

れる。宗教の本意からいへば、教の力によつて人が善くなることが主である。人心が正しくなり風俗が革まり、紛爭も減じ苦惱も少くなる筈である。前にもいふ樣に、聖德太子の法を弘め經を講ぜられた趣意はこゝに在る。然るに年を經ると共に斯ういふ趣意は次第に忘れられて、佛に祈つて直接の利益を求めることが主となつて來た。程度の低い一般人民に高尙な教理の呑込めやうわけは無いから、病を除くとか、災難を攘ふとかいふ一時的の要求のために佛を拜む習はしのみが發達して來たのも據ないことである。此等無智の徒を指導するのは、中流以上の人人の任であるが、これとても同じ弊害は免るゝことを得なかつた。

一般の信仰

天皇をはじめとして、輔弼の任に在る者が國家の爲に佛法を信じられたのは、いかにも有難いことであるが、單に一家一門の繁榮を祈るといふことになれば大分趣意が異つて來る。一家一門の繁榮といふだけ

權門の信仰

ならまだ宜しいが、他の者を排斥して迄も自分の方の繁榮を得たいといふことになると、更に下劣な根生である。然るに藤原氏などが漸く勢力を得るに及んでは、家門の繁昌を望むといふ念が非常に强くなり、また官人の間にも、宮女の間にも勢力を爭ひあふ風が次第に盛になつて來て、如何なる方法を用ゐてでも勝を制せなければならぬといふ有樣になつた。さうして佛教の信仰が專ら斯ういふ事に惡用せらるゝやうになつた。寺を建立するとか、僧侶を保護するとか、いろ〳〵の事をするのは專らその功德によつて自分か又は子孫に現世の利益を與へて貰ひたい爲である。又それ程の力のないものは、他の人の建てた寺に詣でて、自分の家の繁昌を佛に祈る、或は反對者の失敗するやうに祈るといふ風である。法華經も傳教大師が叡山に於て講ぜられて以來、諸經の王として多くの人に貴ばれ之を讀誦し書寫する人も多くあつたが、斯う

いふ卑い目的の爲にしたのでは法華經の功德も現はれやう筈はない。

日蓮上人が

日本國は叡山ばかりに傳敎大師の御時法華經の行者ましましけり。

——《報恩鈔》

と歎息せられたのも道理である。

平安朝の僧侶

平安朝も平城天皇の御代から後になると、藤原氏一門の跋跨はますます甚しくなり、國家のことや人民のことに心を用ゆる人は少く、大概は一身の榮華を願ひ、一門の勢力を張ることに腐心する者のみとなつた。醍醐天皇の御代に菅原道眞が藤原氏に對抗せんとして失敗してから後は、惡い風潮が益々惡くなるばかりで、一般人民の利害休戚などは殆んど顧みられなくなつた。僧侶の中にもまた昔の行基とか傳敎とかいふ樣な大人物は無くなり、一般人民の爲に力を盡すといふことも無く、專ら權門に出入して祈禱の御用を勤めるのみであつた。僧侶の待遇は非常によく、僧正といへば參議と同じ格に取扱はれたくらゐであるが心から尊信を得るといふやうな高僧は殆んどなく、宮女などに戯弄される者の少くなかつたのは、今日に殘つてゐる日記類を見ても想像のつくことである。佛敎がいつ迄も此の狀態で居るならば、一切衆生を盡くわが子と見て我一人のみよく救護を爲すといふ大慈悲から出た佛の敎は全くその本意を失ひ終るべきである。

藤原氏時代の一般人民

一二　日蓮上人以前——二、念佛

藤原氏の全盛時代に於ける一般人民は、まことに氣の毒な境遇に在つたやうである。上に立つ者が權勢爭ひばかりしてゐて、天下の安危などは全く顧みぬのであるから、その下に居るものも銘々私利私欲にの

み耽つてゐる。凡ての制度は皆緩んで弊害百出の有様である。ことに地方の行政などは全く亂れてしまつて、地方官等はたゞ私利を營むことのみを考へてゐる。その隙に乘じて所々に盗賊が起つて掠奪を恣にする。藤原純友などは尤も大袈裟な盗賊であるが此の類の小いのは到る處にあつたのである。而も國司などには之を討平ぐべき覺悟をもつた者は殆んど無い。紀貫之の『土佐日記』の中に、海賊が來るといふ噂を聞いて神佛を祈つたといふ一節がある。貫之は此時土佐の國司の任を終へて京都へ歸るところなのである。然るに海賊の噂を聞いて其の船の中の者が神佛の助けを祈つたといふのは、あまりに情ないことであるが、是が當時の實情である。斯の如き時代に生れた一般の人民は、片時も安い心が無く愚痴ばかりこぼして居たに違ひない。斯の如き境遇に在るものは、何等かの途によつて慰安を得んことを求めてやまぬわけである。

淺ましい雲上人の生活

又華麗を極めた京都の雲上人の生活にも、その裏面には種々の暗流が流れてゐたのである。赤染衛門の『榮華物語』を讀んで見ると、羨しいといふ感じよりも寧ろ痛ましいといふ感じの方が先に立つ。宮廷の生活は勢力の爭奪を以て充されてゐる、その爭ひに負けた者の境遇は實に悼はしいものである。ことに婦人は大概その親とか兄とかの勢力爭ひの道具に使はれ、嫉みあひ咒ひあつて日を送つてゐる。中には勢力を失つて尼になつたのもある毒殺されたのもある。一人として平和な氣持で暮らして居たものは無い。

萌えいづるも枯るゝも同じ野邊の草いづれか秋にあはではつべきとは佛御前に寵愛の移つたのを怨んで祇王の詠んだ歌であるが、藤原時代の女性の多くは盡く斯様な思想をもつて居た事と思はれる。斯く

不安の生活をしてゐたものが、何等かの慰安を得たいと熱望するに至るのも、また自然の勢といはなければならぬ。然るに當時の佛教は斯る痛切なる苦惱を醫すやうな力の無いものであつた。茲に於て新なる教へが時代の要求に應じて出なければならぬ運になつたのである。

祈禱專門の佛教

奈良平安の朝に於て種々の宗派の教へが支那から輸入せられ、僧侶にも種々な人物が出たが、概していへばいづれも現世利益を主とする祈禱によつて多くの人の歸依を得、その宗派の勢力を維持したのである。叡山も天台の本意を發揮することを務めずに、次第に眞言の勢力の下に立つて、祈禱のみを以て其の勢力を張るに至つた故に、日蓮上人は之を評して、

義眞圓澄は第一第二の座主なり、第一の義眞ばかり傳教大師に似たり、第二の圓澄は半は傳教の御弟子、半は弘法の弟子なり——《報恩錄》

遊戯的の信仰

と申され、更にまた

九十六種の外道は佛慧比丘の威儀より起り、日本國の謗法は爾前の圓と法華の圓と一といふ義の盛なりしよりこれ始まれり、あはれなる哉や。——《十章鈔》

と歎息せられたことである。斯くて藤原氏の全盛時代には、佛教の信仰にまた遊戯的の分子が大に加はつて來た。それは種々の法會とか供養とかいふことが自分の榮華を人に誇示する目的のために營まれ、又その座に列るものも花見にでも行く心持で、互の衣服や容貌を評しあふのを重にして、浮いた氣分で集るやうになつたことである。斯る中にも法華經が最勝の教を說いたものとして貴ばれ、この經を書寫することが行はれたことは前にも云つたが、なほ此外に法華八講といふ華やかな儀式が出來て、大勢の僧侶が華やかな袈裟法衣を着て、莊嚴な禮式を

もつて法華經を讀誦し講說するさまは、まことに見事なものであつたと思はれる。しかし此の式に列る官人や官女などは、眞面目な信仰よりも寧ろ遊戯的氣分をもつて集まり來たものが多かつたのである。

新しい宗教の要求

斯の如き佛教では前に云つた一般平民の苦悶に慰安を與へることも出來ず、また華やかな宮廷の間に苦しい生活を送つてゐる人の力にもなり得ないわけである。茲に於てか斯る現世的な教へで無く、現世に於ける苦樂を外にして別に意義のある生活を爲し得ることを教へる所の教が現はれて來べき機運となつた。さういふ教義が佛教中に無いのならば仕方もないが、阿彌陀の力に縋つて西方淨土に往生し、永久に平和な生活を得らるゝといふ教へが、既に大乘佛教中にあつて、印度にも支那にも發達をしてゐたのである。而も此の大なる幸福を得る爲には智慧も學問も才能も、必要はない、現世に於ける身分や地位などには勿論關係が無い、只一意專心に阿彌陀佛を念ずればそれで宜しいといふのである。此の念佛の教義を時代の要求に應じて弘むる人があれば、今までの教へに慊らぬ思ひをしてゐた人々が、必ず之に歸依すべきである。此の潮流に乘じて出たのが彼の空也念佛の創始者として知らる

空也上人

る天台宗の僧光勝である。天慶元年の頃から京都の町に立つて往來の人に念佛をすゝめ、空也上人の名は漸く世に高くなつた。その頃盛に傳唱せられた歌に、

一たびも南無阿彌陀佛といふ人の蓮の上にのぼらぬはなし

極樂は遙けき程と聞きしかど勤めていたるところなりけり

とあるに依つて、その主張の大體はよく分る。彼の傳教大師が唐から歸つて天台の教を傳へた時から、百三十餘年の後である。

空也は天台宗の僧であつて、播磨の峯合寺で大藏經を讀んだといふ

ことも傳はつてゐるから、相當に深い學識をも蓄へて居たのであらうが、その世人に說いたことは極めて平易卑近な敎であつたと見える。多くの僧侶が藤原氏の一門に親み、宮女などの相手になつて榮華を誇つてゐた中に、平民を相手に極めて解し易く入り易い敎を立てたところは確に非凡な人である。殊に京都に於ける弘通に成功して後、なほ遠國のものにも之を傳へやうといふ志を起し、康保二年に都を去り、その死に至るまでの八ヶ年を東國に暮したといふのも感ずべきことである。空也は平民の間に勢力を得たけれども、宮人や宮女の間には勢力が及ばなかつた、しかし此處にも、前に云ふ通り眞面目な宗敎の要求は盛である。此等の階級をも網羅して上下を通じての尊敬を一身に集め、念佛の功德を盛に說いたものは是も天台の僧で、『往生要集』の作者として知られたる慧心僧都である。その序文に

心僧都

顯密の敎法、其の文一に非ず、事理の業因其の行惟れ多し。利智精進の人は未だ難しと爲ざるも、予が如き頑魯の者豈に敢てせんや。是の故に念佛の一門に依る。

とあるに依つて、その特色を知ることが出來るであらう。自分を愚鈍なものと卑下して、一切の智慧分別を退け、たゞ彌陀の慈悲に賴らうといふ法然上人や親鸞上人の主張は、已に此の時に於てその前驅者を有するのである。往生要集は永觀二年の著といへば、空也が念佛をはじめてより四十六年の後に當る。而して法然上人が專終念佛を唱へた時よりも、殆んど二百年の前である。

二人の特色

叡山が傳敎大師の敎義に離背した信仰に移つて行つたことは前にも云つたが、年を經るに隨つて種々の思潮が其の中から湧き出して來た。開基後二百年許にして、他力敎の貴いことを主張する人が、此の叡山

から出やうとは傳敎大師の夢にも想はぬことであつたであらう。慧心僧都は彼の空也よりも遙かに學識も深く、研究の方面も廣く、著述の數も夥しくある、又その地位も高くて上下の尊敬淺からぬ人であつた。斯樣な人が自己の地位も學識も一切賴むに足らぬとして、彌陀の慈悲にすがるより外は無いといふのだから、大なる感動を與へたのも不思議ではない。世俗に弘法大師の作として傳へらるゝいろは歌は、弘法大師の作ではなく、慧心僧都の作であらうとの說がある。確たる證據もないことであるが、その調子から考へても、また中に含まるゝ思想から云つても、慧心僧都の作といふ推想はいかにも尤と思はれる。

念佛專門ではない

斯く二人の非凡な人物が五十年足らずの間に相踵いで現はれ、念佛をすゝめたのであるから、此の向きの思想は隨分發達して來た事と思はれる。しかし未だ天下を風靡するといふ程の勢力は作れなかつたやうである。二人は念佛門の陳涉たり吳廣たるもので、項羽でも無く沛公でも無かつた。それに二人共法然上人などのやうに、彌陀をたのむより外は一切を思ひすてよといふ熱烈な主張をしたのでは無く、空也は觀世音の像を刻したり大般若經を書寫したりした。慧心もその著書について見ると、種々の方面に亘つてゐる。又時代は依然として藤原氏全盛の引續きであつて、たとへ幾多の暗流がその下に往來して居たにもせよ、人々の心に强い印象を與へるほどの大變動は未だ起らなかつたのである。然るに其後藤原氏の盛期もすぎて、世間は著しく多事となり、眞に此の世のたのみ難いことを思ひ知らしむべき出來事が相續いで起つて來た。

藤原氏の衰微

藤原氏の榮華は凡そ四百年續いた、凡ての重要なる地位は其の一族によつて占有せられた。此の分では永久にその勢力が續くであらうと

思はれた。道長が

この世をば我が世とぞおもふ望月の缺けたることも無しとおもへば

と詠んでも誰も怪まぬくらゐであつた。然るに白河上皇が院中に在つて政を聽かるゝに及んで藤原氏の勢力は忽ちにして傾いた。其の院政時代も僅に七十年許りで平氏が政權を握ることになり、清盛の勢は宛ら日の天に冲するが如くであつた。殊に彼が微賤の身より起つて太政大臣となり、一族を要路に立たせ、藤原氏が歴代の勢を積んで爲し得たことを盡く一代の間に爲し遂げたのを見て、天下は驚異の感に打たれ居た。然るに清盛の死なぬうちから其の勢は既に傾きはじめ、壽永二年の秋源氏に追はれて京都を落ち、二年の後には一族盡く亡びた。平治の戰に源氏を破つてより此に至るまで僅に二十六年である。平氏に代つて政權を握つた源氏もまた永く榮えることが出來ず、平氏滅亡後僅に二十四年にして滅亡し、政權は北條の手に歸した。斯くも榮枯盛衰の烈しく移り易るのを見て、誰か無常を觀ぜぬものがあらう。

源平二氏の盛衰

『斯くまで幸運なる平氏の勢力はいつ迄續くであらう』と語りあつて

いつなげきいつ思ふべきことなれば後の世知らで人のすぐらむ

——《西行法師》

と詠まれたのはいかにも尤である。此の世の生活に賴みをかくる愚さを思ひ知るべき時が正に來たのである。

特に武家の滅亡は一般人民に深い感じを與へた事と思はれる。彼の藤原氏の盛時に於ては、地方の人民などは殆んど顧みられなかつた。京都の住居は全く別天地で、そこに公卿や宮女が詩歌管絃の樂みに耽つてゐる間に、地方の農民等は或は盜賊に脅され、或は地方官の苛政に苦

武家と一般人民

信仰の動搖

められて居たのである。然るに武士はもと身分の卑いものであつて、地方に盜賊の起る毎に其の討伐を命ぜられ、それ等の緣故で地方の人民と親みを有するに至つたものであるが、藤原氏一門の者が全く地方を顧みなかつた隙に、いつか地方に其の根據を固め、農民の子弟の中で賴もしい者は取立てゝ家の子郎黨とし、漸く强大なる潛勢力を作り上げた。他日武家が政權を掌握するに至つたのは、斯る潛勢力が現はれて活きたる力となつたが爲である。彼の藤原氏の一門よりは殆んど人として視られなかつた農民等も、武士には親まれ賴まれ、はじめて人らしい扱ひをせられたのである。斯れば藤原氏の衰微に對してよりも武家の滅亡に對して彼等が遙かに大なる同情を寄せたのも當然の事である。

さて藤原氏、平氏、源氏が相踵いで或は衰へ或は亡びたことは、一般の信仰心に大なる動搖を生ずべきこと明である。即ち現世利益を主として神佛に祈願をかくることの賴みにならぬのを、事實によつて證したものである。藤原氏が佛敎を信じて寺や塔を立てたり、法華八講を營んだり、種々華やかな法會などを行つたことは前にも云つたが、彼等はまた所々の神社にもよく信仰を凝したのである。それは皆其の一族一門の繁昌を祈らんが爲であつたのに、その甲斐もなく威勢全く地に墜つるに至つた。平氏が信じた嚴島の辨天も熊野權現も其の滅亡を救つてはくれなかつた。源氏は鶴ヶ岡の八幡宮を造營し、大佛を作りなどしたが、その効もなくて滅亡し、しかも實朝將軍は鶴ヶ岡の社前で殺された。此等の事實を面のあたり目擊した人々は『いかに神佛に祈つても運命の力に抗することは出來ぬ、誠にはかないものである』といふ感じを起さずには居られなかつた。平家物語の中に、宇佐八幡に參籠して加護を祈つた時、神が夢の中にあらはれて、

世の中のうさには神もなきものを心づくしになにいのるらむ

と詠んだことがある。無論こしらへ話であらうが、此の拵らへ話の中に其の頃の世人の考へがよく現はれてゐる。

厭世思想

また保元の亂以來打續いたる戰爭は厭世思想を長ぜしめ、人生のはかない事を尤も適切に感ぜしめた。自ら戰場に臨まぬ農民等でも、戰亂の爲に一族は離散のうき目に逢ふ、收獲を樂んだ田畑は忽ち戰馬の蹄に踏み荒されてしまふ、新に建てた家は忽ち戰火の爲に焚き失はれてしまふといふやうな事に度々出逢へば、無常の感を生ぜずには居られぬ。まして自ら戰に臨むものは、親を討たれて子が殘り、兄が死んで弟が取殘されるといふ例も稀で無い。朝は相並んで進んだ二人が、暮には一人となつて陣に歸るといふさまである。之が爲に心を動さずには居られぬわけである。熊谷直實が敦盛を討つて無常を觀じ、出家したといふのは作り話で、實は所領の爭ひが本だといふことであるが此の作り話に似た事實はいくらも有り得ることである。斯く種々の事變にあつて人生のはかないことを深く思ひ知つた人々が、彌陀の力にすがつて西方淨土に往生することを賴みとせよ、此の世の事はすべて思ひ捨てよと敎へられて隨喜の涙を流したのは法然上人その人の非凡なのにもよるが、一には時勢の然らしむる所といはなければならぬ。熊谷直實が出家した時のことを傳へた話の中に、

熊谷眞實

宿善のうちに催ほしけるにや、幕下將軍をうらみ申す事ありて、心を起して出家して蓮生と申しけるが、聖覺法印の房に尋行きて、後生菩提の事を尋ね申しけるに、左樣の事は法然上人に尋ね申すべしと申されければ、上人の御庵室に參じにけり。罪の輕重をいはず、たゞ念佛だにも申せば往生するなり、別の樣なしとのたまふを聞て、さめざめ

と泣ければ、けしからず思ひ給ひて物ものたまはず。しばらくありて、何事に泣き給ふぞと仰せられければ、手足もきり命をもすてゝぞ後生は助からんずるとぞ、うけたまはらんと存ずる所に、たゞ念佛だにも申せば往生はするぞと、やす〳〵と仰を承り侍れば、あまりにうれしくて泣かれ侍るよしをぞ申しける。――《法然上人行狀畫圖》

とあるのは、いかにも當時の狀況を推するに足るべき物語である。

一三　日蓮上人以前――三、念佛と禪

法然上人は長承二年に生れて、建暦二年に沒した。その出生の年は崇德天皇の御宇で、保元の亂に先だつこと二十三年である。その沒した年は實朝將軍の時で、源氏の衰運既に掩ふべからざる程になつてゐた。即ち上人は其の一生に於て榮枯盛衰のいく度か移り易るさまを經驗した人である、此の一事を以ても念佛の弘通者として適當の人であつたことが分る。その專修念佛を唱へはじめたのは安元元年、即ちその四十四歳の時で、是より後三十六年間、その八十歳にして沒するまで熱心に之を弘めたのである。其の說の要領は次の短い文に盡きてゐる

一枚起請文

もろこし我朝に、もろ〳〵の智者達の沙汰し申さるゝ觀念の念にもあらず。又學文をして念一の心をさとりて申す念佛にもあらず。唯往生極樂の爲には、南無阿彌陀佛と申して疑ひなく往生するぞと思ひとりて申すほかには、別の仔細候はず但し三心四修と申すことの候は、皆決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふうちにこもり候なり。此の外に奥深きことを存ぜば、二尊のあはれみに外れ、本願にもれ候べし。念佛を信ぜん人は、たとひ一代の法をよくよく學すとも一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智の輩に同うして、智者の振舞

をせずして只一向に念佛すべし。――《一枚起請文》

是は法然上人が沒する年に『滅後の邪義を防がんがために所存を記す』といふ斷りつきで記し止めたものである。『此外に深いことを思へば、佛のあはれみを受けぬことにより、救はれぬぞ』と斷言したところに、その眞面目が現はれて居る。彼の慧心僧都に比べて數十歩を進めて居る。

正行と雜行

阿彌陀佛にたよるより外一切の事を思つてはならぬといふ强烈な主張は、前代に於て何人も未だ唱へぬ所であつた。即ち專ら彌陀の名號を稱するを正行とし、觀經、阿彌陀經、無量壽經を讀誦したり、極樂の莊嚴な有樣を觀察し憶念したり、彌陀を禮拜したり、若くは之を讃歎したりすることを助行と名ける。又此の正助二行を併せて五種正行といふ。此の正助二行の外のことは一切雜行として排斥するのである。法然上人は委しく之を說明して、

稱名念佛はこれ彼の佛の本願の行なりかるがゆゑに之を修するものは、彼の佛願に乘じて必ず往生を得る。……雜行無量なればつぶさに述ぶるに暇あらずと。今しばらく五種正行に飜對して、もて五種の雜行をあかさん。……第一に讀誦雜行とは、上の觀經等の往生淨土の經を除きて已外、大小乘顯密の諸經に於て受持し讀誦するを、盡く讀誦雜行と名く。第二に觀察雜行とは、上の極樂の依正をのぞきて已外、大小顯密事理の觀行を、みな盡く觀察雜行と名く。第三に禮拜雜行とは、上の彌陀を禮拜するをのぞきて已外、一切諸餘の佛菩薩等及びもろもろの世天等に於て禮拜恭敬するを、盡く禮拜雜行と名く。第四に名稱雜行とは、上の彌陀の名號を稱するを除きて已外、自餘の一切の佛菩薩等、及びもろ〳〵の世天等の名號を稱するを盡く稱名雜行と名く。第五に讃歎供養雜行とは、上の彌陀佛を除きて已外、一切の諸餘

の佛菩薩等及びもろ〳〵の世天等に於て讃歎供養するを、盡く讃歎供養雜行と名く。その外にまた布施持戒等の無量の行あり、皆盡く雜行の言に攝盡すべし。――《選擇集》

彌陀より外は禮拜せぬ

と云つてゐる。斯樣の主張から釋尊を禮拜することも止められたのである、況んや觀音とか藥師とかを禮拜する如きは無論止めなければならぬのである。勿論もろ〳〵の佛菩薩の貴いことを認めぬといふのでは無い、末世に及んで人々に佛の敎の深い意義を究め知るべき力が無くなり、而も積み來つた罪はます〳〵重くなつて來た時、たゞ賴むべきは如何なる愚なる者も、如何なる罪重き者も救ひ取りて極樂に往生せしめんといふ彌陀の大慈悲心である。故に吾々は之に賴るより外一切のことを思つてはならぬといふのである。

たゞ彌陀の貴いことを說くだけならば宜いが、彌陀以外のものを禮拜するのを雜行として排斥することになると、他の諸宗を敵としなければならぬのが自然の勢である。玆に於てか諸宗の迫害が來る。元久元年に叡山の僧徒に訴へられ、建元二年に讃岐に流されたなどは其の事實に現はれたものである。何等世間的の保護は受けず、却て迫害を蒙りながら屈せずして敎を弘めたところに、宗敎家としての眞價が存するので、之が爲に世間の尊信はます〳〵加はつた筈である。元來念佛の敎は現世利益を主とするものでないから、王朝時代から權門の保護を受くべき筈もなく、たゞ心から此の敎を貴く感ずるものばかりが之に歸依したのである。此點について法然上人は、

諸宗の迫害

凡そ此の阿彌陀經は我朝に都鄙處々に多く流布せり。法華經と最勝王經とは諸宗の學徒兼學すべきよし、桓武天皇の御時宣旨を下されて定め置かれしかば、演說者として、法華を解說する師は多くなりた

れども、暗誦する人なかりければ、法華を暗誦すべきよし重ねて宣旨を下されける後、持經者多くいで來れり。法華はかやうに宣旨によりてこそ流布せられたれ。阿彌陀經は其沙汰なけれども自然に流布して、處々の道場に皆例時とて毎日かならず阿彌陀經をよみ、一切の諸僧阿彌陀經をよまずといふ事なし。これ偏に淨土經有緣のいたす所なり。――《法然上人行狀畫圖》

念佛の全盛

と云つてゐる、その得意想ふべきである。斯くて時代の要求に適應した念佛の教は非常な勢を以て日本國中に弘まつた。その勢の盛であつたことは日蓮上人が

一天の貴賤首を傾け、四海の道俗掌を合せ、或は勢至の化身と號し、或は善導の再誕なりと仰ぎ、一天四海になびかぬ木草なし。――《念佛無間地獄鈔》

と書かれたのに依つても推想すべきである。

親鸞上人

法然上人の沒後十年にして日蓮上人が誕生になつたのであるが、念佛の教はその頃ます〳〵盛であつたものである。法然上人の弟子の中から親鸞上人が出た、この人は承安三年に生れ、弘長三年に沒したので日蓮上人よりは四十九歳の年長である。其のいふ所によれば、

親鸞に於てはたゞ念佛して彌陀にたすけられ參らすべしと、よき人のおほせを蒙りて信ずる外に別の子細なきなり。念佛はまことに淨土に生るゝ種にてや侍るらんまた地獄におつる業にてや侍るらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされ參らせて念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。――《歎異鈔》

とあるが、實際に於ては其の說く所、たゞ法然上人を祖述したといふだ

けのもので無く、別に一家の見を立てたものである。

法然と親鸞

親鸞上人の教は他力の教を極端まで押しつめたものである。成佛せんが爲に念佛するとか、彌陀の力に賴つて極樂往生せんと願ふとかいふのではまだ〳〵淺い。彌陀の慈悲は洪大無邊なもので如何なる者をも救ひ取らうとするのであるから。『念佛にまさる善なき故に惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐる程の惡なきが故に』と考ふべきである。されば吾が佛道に歸依する心になるのも、わが力では無くて、彌陀の力が此の心にはたらく故に外ならぬので、一切わが行ひとか、わが働きとか、わが望みとかいふべきものは無い。即ち

わがはからひにて行ずるにあらざれば非行といふ、わがはからひにて作る善にあらざれば非善といふ。ひとへに他力にして自力を離れたる故に、行者のためには非行非善なり。——《歎異鈔》

純他力の教

といふことになる。されば吾々は一切の分別をすてゝ只々彌陀のはからひに住せて置くが宜いのである。此の理を押しつめて行くと、

久遠劫より今まで流轉せる苦惱の舊里はすて難く、いまだ生れざる安養の淨土は戀しからずさふらふこと、まことによく〳〵煩惱の興盛にさふらふにこそ。名殘惜く思へども娑婆の緣盡きて力なくして終る時は、かの土へは參るべきなり。いそぎ參りたき心なきものを、ことにあはれみ給ふなり。これにつけてこそ、いよ〳〵大悲大願たのもしく、往生は決定と存知さふらへ。——《歎異鈔》

といふ如き極端まで行くのである。

報恩の念佛

斯くまで洪大なる彌陀の慈悲を知つた人は、感謝の念が是非とも起るべき筈で、此の感謝の念が即ち念佛の行となるのである。即ち報恩の念佛である、此の報恩といふことが凡ての善事の基となるべきである。

彌陀の名號唱へつゝ　信心まことに得る人は
憶念の心つねにして　佛恩報ずるおもひあり

――《淨土和讃》

といふはこの心である。斯く信ずるによつて、心の平和も得らるべきで、一切の思慮辨別は何の用をも爲さぬものである。さればこそ

何條わがはからひをいたすべき。きゝわけ知りわくるなど、わづらはしくは仰せさふらふやらん、これ皆ひがごとにて候なり。たゞ不思議と信じつる上は、とかく御はからひあるべからず候。――《末燈鈔》

とも敎へたのである。親鸞上人は斯る考へから、一切自分の智慧才覺をたのむことを罪と爲し、自ら『愚禿』と號し、敢て僧侶を以て自ら居らず、法衣も袈裟もたゞ墨染のものに限り、弟子等をも決して弟子とは呼ばず、『御同朋』とよび『御同行』と云つてゐたのである。『それがし閉眼せば賀茂川にいれて魚にあたふべし』と云つたのも、たゞ徒に口先のみで謙辭を陳ねたのではない。今日では其の廟に金銀五彩を彫ばめ、その子孫は王公の如き生活を爲して居る。親鸞上人たるもの地下に於て如何なる感を爲すであらう。

御同朋

眞宗の勢力

親鸞上人が自ら此の淨土眞宗の敎を開いたのは、その五十二歳の時即ち元仁元年で、日蓮上人の開宗に先つと二十九年である。それより九十歳で沒する迄殆んど四十年近く敎を弘めたのであるから、大なる勢力を作り得た筈である。然るに不思議なことには、日蓮上人の著書及び消息文の中に親鸞といふ名が一ヶ所も見えて居ないのである。日蓮上人の折伏主義からいへば、釋尊の本意を失つた敎は一切排斥して法華經の眞意を世に顯はさなければならぬのであるから、その當時に勢力のあつた敎は一々捉へて、之に批判を與へたのである。それに親鸞上人に

對する一言の批判も無いのは、其の敎が未だ世間を動すほどの勢力を有せなかつた爲か、若くは其の勢力を憚つて之に敵對することを避けたか、いづれかの理由でなければならぬ。然るに日蓮上人は當時最も勢力の旺盛であつた法然上人の敎に對してさへ忌憚なき批評を下し、『念佛無間』を斷言して居られるくらゐで、如何しても親鸞上人の勢力を恐れたとは考へることが出來ぬ。然らば理由は前者でなければならぬ。眞宗の大勢力となつたのは恐らくズツト後の事で、當時に於ては信ずる人と云つても極少數で一般には淨土宗と格別かはらぬものとして見られて居たのであらう。

禪宗の勃興

念佛の敎が天下を風靡するに及んで、更に之と對立すべきものが起つて來た、それは新に宋より傳はつたる禪宗である。禪宗は文德天皇の御宇に一たび我が國に傳はり、義空といふ唐僧が洛西に檀林寺を開いたといふが、汎く行はれないで終つた、それはその筈である、萬事形式主義で、深いとは考へぬ習はしであつた時代に『直指人心』などいふことを說いても呑込めなかつたのが當然である。その後時代は大に進んだ三百餘年の間、世態の變化を閲し盡して、人心は正に深刻なる宗敎的要求を有するに至つたのである。元來人の心には弱い方面もあれば强い方面もある。艱苦に逢つて力を失ふものもあれば艱苦に鍛へられて力を得るものもある。運命の不思議な勢力を知つて、その運命に服從する決心をつけるのも貴いことであらうが、之に屈せずして自分の途を開いて進まうとするのは更に貴いことである。他力敎の時代の要求に應じて起つて繁昌を極めると共に、之と相對すべき自力の敎の勃興して來たのは、自然の勢といはなければならぬ。

世尊昔し靈山會上に在て花を拈して衆に示す。是の時衆皆默然たり。

教外別傳

唯迦葉尊者のみ破顔微笑す。世尊云く、吾に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり、不立文字、教外別傳摩訶迦葉に附屬す。――《無門關》

といふやうな傳說は、人の思慮分別を一切無用のものとして掛る念佛宗の敎と、絕好の對照を爲すものである。

前にも云つたやうに、藤原氏の衰微、平氏、源氏の滅亡等の事實は一般の人心に大なる刺戟を與へた。此の刺戟は世をはかなむ所の弱い心を起させたのみならず、また一方に元氣を鼓舞させる元ともなつたのである。彼の藤原氏の全盛時代に於ては、重要なる地位は盡くその一族に占領せられ、いかに材幹あるものでも、藤原氏以外に在つては其の力を伸すことは出來なかつた。斯る時代はたゞ人をして無氣力ならしめ、迎合主義のみを增長せしむるものである。然るに世間に變動が烈しくなり、舊い形式が破壞されることになれば、卑いものでも功を立て力をふ

武士の時代

るひ。運に乘じて顯要の地位をも占められるのであるから、活氣づいて來るのも當然である。勿論農民などは時代が變つても格別發展を遂げることも出來ぬが、武士は正に得意の時に向つたのである。而して源氏は主として東國にその根據地を有し、平氏は主として西國に根據地をもつてゐたので、源平二氏の爭ひは同時に東國武士と西國武士の競爭たる觀があつた。競爭は必ず進步を生むものである。戰場は武士の才略膽氣を試むべき場所であるが、政權武士の手に歸するに及んで、武士の力量を示すべき場合は戰時と平時とを問はず、いくらでも有るやうになつた。たとへ一方には無常を觀じ厭世思想を長ぜしむべき事柄が多くあつたとしても、武士の全體が斯る弱々しい思想で支配さるべき筈は決してない。

武士は剛健の氣象を養ひ、恩義にむくゐんが爲に生命を擲つて働く

信仰と勇氣

ことを本意とすべきであるが、之が爲に信仰の必要を感ずることである。たとへ自分一人の死ぬことは何とも思はぬ者でも、戰敗について心を動さぬわけには行かぬ。又功ありて賞せられず、忠義の心をもちながら君に疎まるゝといふやうな事があると、凡夫の常として平然としては居られぬ。ところが如何なる事に出逢つても心を動さぬやうでなければ、眞の勇者とはいはれぬ。即ち斯る覺悟を固めんが爲に信仰を求むるに至るのである。此の世を、あきらめて平和の生活を爲さんが爲に信仰を求めるのでなく、活動力の源泉として信仰を求めるのである。斯る要求は『衆流を截斷するに至ては東湧西沒、逆順縱横、與奪自在なり』といふやうに、此の心一つの置きどころで、如何なる境遇に在るも之が爲に動さるゝこと無きを得るといふ、禪宗の敎によつて滿足せらるべきである。禪の方では自分を弱いもの、はかない者とは思はず、自分に佛性

即身成佛

の存することを認め、釋迦も達磨も吾々と同じものだとするのである。たゞ此の佛性が蔽はれて居るから境遇の爲に制せらるゝので、此の蔽ひを拂つて明鏡の如き本心に返れば、いかなる境遇に在ても別天地がそこに開かるべきだといふのである。

雲門垂語して云く、人々光明の在る有り、看時見えず暗昏々。――《碧巖錄》

とある如く、極樂をわが心の外に求むる必要はないのである。此の心さへその本來の性質を發揮し來れば、たとへ劍の光の下に立つても平然として笑つて居られる筈である。斯る境界に至らんが爲に修行をするので、坐禪の如きも其の修行の一つなのである。念佛の敎に慊らず感じてゐた武士が斯る敎に對して渴仰の念を起したのは當然のことであらう。

一四　日蓮上人以前——四、鎌倉時代の概觀

短刀直入的の教

禪宗に於て煩瑣なる研究方法を貴ばず、短刀直入的に悟道し得べきことを教へたのは、武士等の尤も喜ぶ所であつたであらう。天台宗や華嚴宗の教がいかに高尙なものであつても、十二因緣を分ち說くとか、五十二位の悟り方を別つとかいふ複雜な教は、常に死生の間に出入して輸贏を瞬間に決する所の武士等の堪へ得る所でない。然るに禪の方では大事な點を捉へれば宜いといふ流義で、たとへ如何ほど學問があつても研究が深くても、大事な一點を捉へそこなつてゐては何にもならぬといふのである。

南泉因に趙州問ふ、如何か是れ道。泉云く、平常心是れ道。州云く、還て趣向す可きや否や。泉云く、向はんと擬すれば即ち乖く。州云く、擬せずんば爭でか是れ道なるを知らん。泉云く、道は知にも屬せず。不知にも屬せず。知は是れ妄覺、不知は是れ無記。若し眞に不疑の道に達せば猶ほ太虛の廓然として洞豁なるが如し、豈に强て是非すべけんや。州言下に於て頓悟す。——《無門關》

とある如く、知と不知とを分たず、眞の悟りに入ることが出來るのである。しかし唯斯ることを妄想してゐるのではなく、斯る悟りを開く方法として種々の教が遺され、坐禪等の仕方が委しく定められてあるのである。

禪宗の傳來

禪が支那から傳へらるゝと共に、忽ちにして武士階級の間に弘まつて、大なる勢力となつた。現今わが國に行はるゝ禪には、曹洞、臨濟、黃檗（おうばく）等の分派があるが、此中で黃檗は德川時代の初期に傳はつたので、鎌倉時代に傳はつたものは曹洞臨濟の二派のみである。而して此の兩派共に

榮西禪師

支那から傳はつたもので、之を傳へたものは共に天台宗の僧である。臨濟派の禪は建久二年、榮西禪師の歸朝と共に傳はつたので、即ち法然上人の開宗より十六年の後、日蓮上人の開宗より六十二年前である。曹洞の禪は之よりやゝ後れて、道元禪師の歸朝によつて傳はつた。これは安貞元年のことで、榮西の歸朝より三十六年の後である。

榮西禪師は天台及び眞言の敎に通じ、仁安三年二十八歲にして入宋し天台山に上つて研究し、同じ年に歸朝したのであるが、文治三年再び入宋し、印度へ赴いて佛蹟を拜せんと企てたが、止められて果さず、臨濟の禪を習つて歸朝したのである。交通の不便であつた當時に於て、二度までも支那へ赴いたといふのが已に普通の人の出來ぬことである。殊に海外に法を求むるといふことは殆んど二百年來打絕えた所で之を復興したる勇氣は大に稱讃せねばならぬ。また二度目の入宋は四十七歲の時であつた。此の垂老の年を以て印度に入ることを企て、事の成らぬにも屆せず、また新に研究の途を開き、五十一歲にして歸朝し、七十五歲にして歿するまで敎を弘むる爲に盡瘁した。斯の如き人にして初めて斯の如き敎を傳へ得べきである。其の歸朝後十一年即ち建仁二年に將軍源頼家が京師に建仁寺を建てゝ榮西を迎へたのが、日本に於ける禪刹の始めと稱せられる。(文德天皇の時のは別として)その後十三年を經て將軍實朝が鎌倉に壽福寺を建てゝ榮西を迎へたのが即ち鎌倉に禪の傳はつた始めで、これは其の歿する前年、即ち建保二年のことである。此の新しい敎の勃興を嫉んで叡山の僧徒が之に迫害を加へんとしたが、榮西『興禪護國論』を著はして之に答へ、山徒終に屏息したといふ。以て其の意氣を見るべきである。

道元禪師も初めは天台の僧であつたが、建仁寺に赴いて榮西に謁し

て大なる感化を受け、禪に歸したのだといふ。貞應二年二十四歳にして入宋し諸名山を歴遊して曹洞派の禪を學び安貞元年、二十八歳にして歸朝した。京都の建仁寺に居り、また深草に移つたが、此時は禪の教も餘程汎く世に弘まつてゐた頃であつたので、道元の德を慕ひ來つて教を乞ふものが日々に多くなつた。然るに道元は之を厭ひ、斯くては自ら道を修むるの暇が無いと、隱遁の志日に盛であつた。寛元二年その四十五歳の時に至り、波多野義重が越前に永平寺を建てゝ道元を招いたので、直ちに此地に赴き、寶治元年北條時賴に招かれて鎌倉に來て法を說いたが、翌年また越前へ歸つた。建長五年寺を弟子に讓つて京に上り、幾くもなく五十四歳を以て歿した。その德をしたふ者の夥しくあつたにも拘らず、更に名利の念なく、後嵯峨天皇その德行を嘉せられ、勅して紫衣を賜はつたのをも、忝く拜受したのみで、終身一たびも身に着けなかつたといふことである。『正法眼藏』等の遺著は今に學者の重んずる所のものである。

二人の特色

禪の教が時代の要求に應ずべきものであつたことは前に云つた通りである。而して之を支那より傳へた人は二人共に非凡なる人物であつた。ことに榮西が歸朝後十一年を九州の果てに送つて、敢て求むる所なく、將軍賴家に迎へられてはじめて中央の舞臺へ出て來た、その悠然たる態度は、權門に出入することを誇りとした往時の僧等と全く選を異にしてゐる。又道元が多くの人に歸依されても更に心を動さず、自ら修むることを大切だとして越前の山の中へ隱れたのは尤も及び難い所と思はれる。斯る高潔なる心、敢て沽らんとせず、敢て求めんとせぬ心があつてはじめて人に教ゆべきである。術策を弄して自己の勢力を作らうとするやうな陋劣な心で、どうして大なる感化を世間に與へること

とが出來やう。南陽に隱れて名利の念を絕つたる孔明なればこそ、廬を出て直ちに王者の師となることが出來たのである。

當時に勢力ありし諸宗

兎もあれ、此の二人の感化と、その傳へたる敎の時代に適合するものであつたとの爲に、禪宗は忽ちにして武士の間に弘まつた。奈良朝以來傳はつた凡ての宗派を數へて見ると、平安朝までの間に俱舍成實、法相、三論天台、華嚴眞言の八宗が傳はり、鎌倉時代に禪宗が傳はつたのと合せて九宗となる。これに法然上人の淨土宗と、親鸞上人の淨土眞宗とを加へて十一宗。その最後に起つたのが日蓮上人の新しい敎である。さて此等の中で淨土宗と禪宗とは時代の要求に應じて新に起つたのであるから、勿論大勢力である。それから眞言宗も舊くからあるものではあるが、その神秘的なる敎義と、その祈禱とを特色として新しい二宗の間に介在してなほ大なる勢力をもつてゐた。その他の中で、叡山や南都のやうに領地があるとか僧兵を蓄へてゐるとかいふ點で勢力のあるものもあつたが、宗敎としての勢力は此の三者に對比し得べくも無かつた。

諸宗と日蓮上人

斯く觀察し來る時は、日蓮上人が此等諸宗の後に出て新しく敎を開かれたについては、非常なる覺悟を有し、非常なる抱負と確信とを有せられたに違ひないといふことが明になるであらう。當時に勢力のあつた敎に一として根柢の淺いものは無く、いづれも其の開祖として非凡なる人物を有し、いづれも、其の時代の要求に應じて現はれたものである。之を盡く排し去るといふは實に容易の業ではない。しかし數多くの星がいかに光を爭つても、太陽の前には共に其の光を失はなければならぬ。いかに偉大な人が之を創めても、又いかに高尙なる敎義を立てゝゐても釋尊の本意に合はぬならば、永遠の生命を保つべきで無い。日蓮

上人はこゝに着眼したる故に、その困難は覺悟して決起せられたのである。されば、

宗々互に權を爭ふ、予此を爭はず、たゞ經に任すべし。――《開目鈔》

と其の立場を宣明せられたのである。なほ委しく其の抱負を語つて、次の如くに言はれてある。

日蓮上人の抱負

問て云く、天台傳教の弘通し給はざる正法ありや。答て云く有り。求めて云く、何物ぞや。答て云く三あり、末法のために佛留め置き給ふ、迦葉阿難等、馬鳴龍樹等、天台傳教等の弘通せさせ給はざる正法なり。求めて云く、其の形貌如何、答て云く、一には日本、乃至一閻浮提一同に本門の教主釋尊を本尊とすべし。所謂寶塔の内の釋迦多寶、外の諸佛、並に上行等の四菩薩脇士となるべし。二には本門の戒壇。三には日本乃至漢土月氏、一閻浮提に人ごとに、有智無智をきらはず、一同に他事をすて、南無妙法蓮華經と唱ふべし。

此事未だ弘まらず、一閻浮提の内に佛滅後二千二百二十五年が間一人も唱へず日蓮一人南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と聲も惜まず、唱ふるなり。例せば風に隨て波の大小あり、薪によりて火の高下あり、池に隨て蓮の大小あり、雨の大小は龍による。根深ければ枝しげし、源遠ければ流長しといふこれなり。周の代の七百年は文王の禮孝による、秦の世ほどなし、始皇の左道なり。日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華經は萬年の外、未來までも流るべし。日本國の一切衆生の盲目をひらける功德あり、無間地獄の道をふさぎぬ。此功德は傳教天台にも超え、龍樹迦葉にもすぐれたり。極樂百年の修行は穢土一日の功に及ばず、正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか――《報恩鈔》

まづ宗教界の觀察は概略ながらに此に止め、その當時の一般の形勢に

ついて數言を附け加へて、然る後に日蓮上人の事蹟を略説することにしやう。

日蓮上人の時代は即ち北條氏全盛の時代である。承久の亂あつて三上皇は遠國に遷されたまひ、政權全く北條氏に歸してより三十二年の後、日蓮上人はその教を開かれたのである。北條の惡逆無道は論に及ばぬことであるが、之について南朝の忠臣たる北畠親房卿は斯う論じてゐる。

承久の亂

神皇正統記の批評

白河鳥羽の御代のころより、政道の古き姿やうく衰へ、後白河の御時兵革起りて姦臣世を亂り、天下の民殆塗炭に落ちにき。賴朝一臂を振ひてその亂を平げたり。王室は古きにかへるまで無かりしかど、九重の塵もをさまり、萬民の肩もやすまりぬ。上下堵をやすくし、東より西よりその德に服せしかば、實朝なくなりても背く者ありとは聞えずこれにまさる程の德政なくして、いかでたやすく覆へさるべき。たとひ又失はれぬべくとも、民安かるまじくは上天よもくみし給はじ。次に王者の軍といふは、科あるを討じて疵なきをばほろぼさず。賴朝高官に昇り守護の職をたまふ、これ皆法皇の勅裁なり、私に盜めりとは定めがたし。後室その跡を計らひ義時久しく彼が權をとつて、人望に背かざりしかば、下には未だ疵ありといふべからず、一往のいはれ計にて追討せられんは上の御科とや申すべき。謀叛起したる朝敵の利を得たるには比量せられがたし。かゝれば時の至らず、天のゆるさぬ事は疑ひなし。但下の上を剋するは極めたる非道なり、終にはなどか皇化にまつろはざるべき。先誠の德政を行はれ朝威を立て、彼を剋する計の道あつて、その上の事とぞ覺え待る。――《神皇正統記》

これは單なる歷史家の空論でなく身命を擲つて王事に盡した人の言

である。義時倍臣の身を以て皇室を傾け奉つたのを、一般の人民は平然として見て居て、なほ其の指揮の下に屬して命令を聽いて居たのは今日の吾々から考へて如何にも奇怪千萬なことであるが、その由來する所遠いことで、易にいはゆる『霜を履んで堅氷到る』ものである。古は天子政を自らしたまひ、皇恩下に霑ひ、下情上に通じ、國内はさながらに一家の如くであつた。然るに藤原氏國政を秉つて以來は、上下の間壅塞せられ、私の爭ひの爲に天下の大亂を來すことを顧みぬものまで生じた爲に、人民は塗炭の苦に落ちて、たゞ此の苦境を脱しさへすれば宜いといふ氣になつて、順逆正邪の別を考へる力が乏しくなつたのである。これは人民の罪ではなく、之を導くものゝ罪である。教養の道を怠つたのが根本の失である。日蓮上人が斯る時代に出で、國民教養の根本に眼を着けられたのは、尤も貴い事といはなければならぬ。

教へざるの民

斯く一面から見れば此の時代は大混亂の時代であるが、一面から見れば思想發達の歴史に一時期を畫する時ともいふことが出來る。第一從前は京都が政事の心中であると共に有らゆる文化の中心で地方の人は全く輕視せられて居た。されば文學でも美術でも全く都會的色彩のみをもつて居た、宗教でも矢張りさうである。然るに鎌倉時代になつて地方の人も人の數に加へらるゝやうになり、剛健率直な地方氣質がその價値を認めらるゝに至つたのは、注目すべき事實である。元來日本人といふものは柔弱な國民ではなく、剛毅にして率直な性質を具へてゐたので、建國の時代は勿論のこと、下つて奈良朝の頃までもその風は存してゐた。それは古事記や萬葉集などを見れば明に分ることである。然るに平安朝に於ける京都の生活といふものは華奢をきはめた女性的なもので、以前とは全く異つてしまつた。然らば日本人固有のシッカ

武士道の成立

平氏と源氏

リした男らしい性質は全く亡びたかといふに、決してさうでは無く、それは、邊國の人民の間に殘存してゐたのである。されば邊國に於て發達したる武士道の中には此の剛健率直な風が充分に含まれてゐたので、畢竟するに武士道が永い生命をもつてゐたのは、此の日本固有の國民性をその基礎としたが爲である。

平氏は武家であつて藤原氏に代つて政權を執つたのであるが、スツカリ京都風に征服されてしまつて、武士に固有な氣風を失ひ終つたのは惜むべきことである。重盛の嫡子と生れた維盛が屋島から逃れて京都へ歸らうとして歸られず、高野山に登つて僧となり、後に那智の海へ身を投げて死んだなどは、一族の耻辱といふべきである。斯ういふ譯で武士の特色は終に平氏の爲に發揮せらるゝに至らなかつたが、賴朝は此點に深く意を用ひ、素朴にして剛毅なる東國武士の特色を失はぬやうに意を用ゐたから、鎌倉時代に至ては田舍臭い武士氣質が充分にその價値を認めらるゝやうになつた。實朝は萬葉集を究めてその雄渾な調をよく學んだ人と云はれてゐるが、たとへ如何に萬葉を眞似やうとも武士的氣風の中に育つた人で無くば、

山はさけ海はあせなん世なりとも君に二心わがあらめやも

時によりすぐれば民のなげきなり八大龍王雨やめたまへ

といふが如き歌は出來なかつたであらう。之を平家の武士が軍中でよんだ

君すめばこゝも雲井の月なれどなほ戀しきはみやこなりけり——

《平時忠》

東國風と西國風

などいふ歌に比べて見ると、著しい對照を示してゐる。日蓮上人の出現は斯く東國風が勢力を得來つた時なので、上人の書かれたものにも素

朴剛健な東國風は充分に發揮されてある。之を親鸞上人と比べて見ると、その內容はしばらく問はぬでも、その語調に於て曲線的な京都風と直線的な東國風との對照を示してゐるところが頗る興味深く思はれる。

往生を不實とおぼしめさん人は、まづ己が身の往生をおぼしめして御念佛さふらふべし。己が御身の往生一定とおぼしめさん人は、佛の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために御念佛心にいれて申して、世の中安穩なれ、佛法ひろまれとおぼしめすべしとぞ覺えさふらふ。よくよく御案さふらふべし、此ほか別の御はからひあるべしとは覺えずさふらふ。——《御消息集》

我一門の者のために記す、他人は信ぜざれば逆緣なるべし。一滯をなめて大海の潮を知り、一華を見て春を推せよ。萬里を渡て宋に入らずとも、三箇年を經て靈山に至らずとも、龍樹の如く龍宮に入らずとも、無著菩薩の如く彌勒菩薩にあはずとも、二所三會にあはずとも、一代の勝劣は知れるなるべし。……當世日本國に第一に富める者は日蓮なるべし、命は法華經に奉る。名をば後代に留むべし。大海の主となれば諸の河神皆從ふ、須彌山の王に諸の山神從はざるべしや。法華經の六難九易を辨ふれば、一切經讀まざるに從ふべし。——《開目鈔》

此の豪爽にして雄渾なる語調は平安文學に於て決して見ることの出來ぬものである。

支那との交通

なほ鎌倉時代の一つの特色として數ふべきは支那との交通の再び開けたことである。延喜の朝に於て遣唐使をやめて以來、久しく鎖國の狀態となり、外からの刺戟も無かつたのが、平氏の時代から又交通の路が開けかゝり、鎌倉時代に及んでは商船の往來もあり、僧侶の入宋する

ものなども出來て、大にしては宗教學藝等より小にしては俗樂遊伎の如きものまで相續いて輸入せられ、わが思想界に新たなる刺戟を與へ、その影響は餘程後までも殘つてゐたのである。此點より見ても、鎌倉時代をたゞ混亂の時代として輕視し去ることは出來ぬのである。

斯る時代に日蓮上人が出られたのである。正しく法華經の弘まるべき機運が今より開くべしと信じて世に立ち、その一生の間

涅槃經に云く、一切衆生受異苦、悉是如來一人苦等云々。日蓮云く、一切衆生の一切の苦を受るは悉く是日蓮上人の苦と申すべし——《諫暁八幡鈔》

との大慈悲心のために、その奮鬪を續けられたのである。今より其の事の一班を記述して然る後にその教義に及ぶことにしやう。

法師の職分

一五　日蓮上人の事蹟——一、遊學時代

佛は一切衆生を救はんが爲に法を說かれたのである。されば其の法がいかに貴いものであらうとも、汎く世に弘まつて一切の人を救ふに至らなければ、佛の世に出られた本意は達せられぬ。佛の慈悲心を承け繼いで一切衆生の爲に法を弘むる人は、佛に並ぶべき貴き人であつて誰も之に對して充分の尊敬を拂はなければならぬ。此の貴き地位に在り、貴き職分を果すものは、最も大なる力を有する者で、人世に於ける如何なる勢力も之を壓迫し之を妨害することは出來ぬ。法華經に之を讃じて、

如來の滅後に其れ能く書持し、讀誦し、供養し、佗人の爲に說かん者は
如來則ち衣を以て之を覆ひたまふべし。又佗方の現在の諸佛に護念

せらるゝことをゝん。是人は大信力及び志願力、諸善根力あらん。當に知るべし、是人は如來と共に宿するなり。――《法師品》

とある。斯る貴き法師は勿論、一身の名聞や利得を塵ばかりも思はぬ筈である。若し法師の名を冒しながら一身一家の私を謀るの念が些たりともあらば、人を欺き佛を欺くの罪まことに輕からぬことである。日蓮上人はこの事につきて、

日蓮上人の訓誡

誠に我身貧にして布施すべき寶なくば、我身命を捨て佛法を得べき便あらば身命を捨てゝ佛法を學ぶべし。とても此身は徒に山野の土となるべし、惜みて何かせん、惜むとも惜みとゞめがたし。人久しといへども百年に過ぎず、其間の事はたゞ一睡の夢ぞかし。受け難き人身を得て適出家せる者も佛法を學し、謗法の者を責めずして徒に遊戯雜談のみして明し暮さん者は、法師の皮を着たる畜生也。法師の名を借りて世を渡り身を養ふといへども、法師となる義は一もなし、法師といふ名字をぬすめる盗人也。耻づべし、恐るべし。――《松野殿御返事》

とまで極言せられた。まことに上人の御一生こそ法師たるに耻ぢぬものであつた。何人も上人の御事蹟を知つては、自ら愧ぢ自ら奮はぬを得ぬであらう。

誕生

日蓮上人は後堀河天皇の貞應元年壬午、二月十六日を以て安房國小湊の海邊に誕生せられたのである。即ち今より六百九十四年のむかしに當り、鎌倉は源氏亡びて後四年北條義時執權の時である。父は貫名次郎重忠といふ武士の果であると傳へられ、その家系についても種々の傳說があるが、上人自らは何も云はれず、たゞ其の弟子に對して『東條片海の石中の賤民が子』といひ、若くは『貧窮下賤の者と生れ旃陀羅が家より出たり』とのみ語られた。而してなほ語をつゞけて、

心こそ少し法華經を信じたる樣なれども、身は人身に似て畜身なり。魚鳥を混丸して赤白二滯とせり、其中に識神を宿す。濁水に月のうつれるが如し、糞囊に金をつゝめるなるべし。――《佐渡御書》

と申されてある。是だけで充分である。いかに立派な祖先であつても、日蓮上人の如き大人物に一層の光輝を添へるほどの人物はあり得ない。氏も素性もない者としても『佛の御使』として世に出られた上人の貴さは減ぜぬ。泥の中から掘り出した名玉、汚い囊に包んだ黃金は、こと更光も眩ゆく感ぜらるゝわけである。

出家

十二歲にして淸澄山に上り、道善坊を師として、十六歲の時出家せられたといふのが事實と思はれる。それは上人の自ら記された所に、

安房國長狹郡、東條鄕、片海の海人が子なり。生年十二、同じき鄕の內淸澄寺と申す山にまかりて、遠國なる上、寺とはなづけて候へども修學の人なし。然るに隨分諸國を修行して學問し候ひしほどに云々――

《本尊問答鈔》

隨分に走りまはり、十二、十六の年より三十二に至るまで二十餘年が間、鎌倉と京と叡山と園城と高野と天王寺等の國々寺々あら〳〵習ひ回り候ひし。――《妙法尼御返事》

とあるに依て知るべきである。此の淸澄寺は現今では眞言宗に屬して居るが、日蓮上人の當時に於ては天台宗であつて、眞言でするやうな祈禱を專とする所謂台密の寺であつた。而して上人の出家せられた當時この寺で充分研究などをする便も無かつたことは『寺と名づけて候へども修學の人なし』とあるに依つてほゞ察せられる。而もその頃の習はしとして、何れの宗でも一般に念佛を旨としてゐたのであるから、上人もはじめは念佛を唱へ、之によつて成佛の緣を得んと心がけられたこ

疑惑

と丶思はれる。それは上人自ら後年に至り、

日蓮も過去の種子已に謗法の者なれば、今生に念佛者にて數年が間法華經の行者を見ては未有一人得者、千人無一等と笑ひしなり。今謗法の醉さめて見れば、酒に醉える者父母を打て悦びしが、醉さめて後歎きしが如し。――《佐渡御書》

と記されたのでも分る。また更に

此度いかにもして佛種をも植ゑ生死を離るゝ身と成らんと思ひて候ひし程に、皆人の願はせ給ふ事なれば、阿彌陀佛をたのみ奉り、幼少より名號を唱へ候ひし程に、いさゝかの事ありて此事を疑ひし故に、一の願を發す。日本國に渡れる處の佛經並に菩薩の論と人師の釋を習ひ見候はゞや、又倶舍宗、成實宗、法相宗、三論宗、華嚴宗、眞言宗、法華天台宗と申す宗共あまた有りと聞く上に、禪宗淨土宗と申す宗も候なり、此等の宗々枝葉までこまかに習はずとも、所詮肝要を知る身とならばや。――《妙法尼御返事》

とも記されてある。『いさゝかの事ありて此事を疑ひし』と只一言に述べられた所に、大切な意味の籠つてゐることを考へなければならぬ。

佛教の特色

同じ釋尊の教を奉ずるものが何故斯く分れたのか、いづれが釋尊の本意に叶つたものであるか、此の疑問は誰の胸中にも浮び來べきことである。元來佛教は基督教などに比べると其の教が單純でない。耶蘇が教を說いたのは凡そ三年許の間であるが、釋尊の說法は凡そ五十年に亘つてゐる。又耶蘇は格別深い學問をしたのでも無く、冥想によつて自ら神より此世に送られたものであることを確信するに至つたのであるが、釋尊は淨飯王の王子として充分の教育を受け、その當時の有らゆる學者の教を聽いた上に自ら悟りを開かれたのである。されば釋尊の

教は無論其の自ら悟り得た所を說かれたのであるけれども、一面から見れば印度の哲學說を集めて大成したるの觀がある。而して五十年間種々の人に對し、種々の場合に應じて敎を施されたのであるから、其の敎はバイブルなどの如き單純なるもので無く、極めて多方面である。その上に釋尊の後から又種々の學も深く德も高い人が出て、多くの論を書いて居る(大乘起信論とか、倶舍論とかいふやうな)のであるから、後世に生れて自己の信仰を定めやうとするものは、此の夥しい經論の中の何れに說かれてある所を、自分の信仰の中心としやうかといふことに就いて、惑はざるを得ぬのである。

依經と祖師

それ故に後に出た人が此の多くの經の中で、特に大切なものとして或る經をぬき出して、其の信仰の基く所を定めるのである。これに依つていろ〳〵の宗派が分れるので、その最も大切なものとして立てる經を依經といひ、之をはじめて唱へた人を祖師といふ。例へば華嚴經を依經とし、馬鳴菩薩を祖師とするものを華嚴宗とし、大日經を依經とし、龍猛菩薩を祖師とするものを眞言宗とする。天台宗は法華經が依經、淨土宗は無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經の三部が依經である。獨り禪宗は敎外別傳と云つて、釋尊から直ちに迦葉に、心より心に傳へたといふのだから依經といふものはない。斯くて、宗派が幾つにも分れて、各派ともいろいろの高僧が出て、それ〳〵に深い研究を積んだのであるから、その一派の敎を究むるだけでも容易のことでは無い。凝然ほどの博識な人でも、

諸宗の義趣深奥にして知り難し、一宗すら尙ほ未聞を嗜む、況んや八箇の宗に於てをや。——《八宗綱要》

と云つた。これは謙辭ではなく實際のことである。しかしながら此の諸

教の矛盾

の經に說かれたところが大概似たことであれば疑も起らぬが、その中には隨分矛盾する所もあり、兩立し難いやうな教もあるので、後世からは疑が生じて來る。此等の樣々な教の中でいづれが釋尊の眞意であらうか。いづれも佛の教であるから眞理を含んでゐるには相違ないが、その中には一時的の教と永遠のものとなければならぬ。永遠に凡ての人の信奉すべき教といふのは何れであらうか。

念佛に對する疑惑

ことに淨土宗の教に於ては、末代に及んで如何なる教も用なし、たゞ彌陀を念ぜよといふので、法然上人は自ら大原に於て諸宗の僧と問答をした、所謂『大原談義』の時の有樣を語つて、

聖道門は深しといへども、時すぎぬれば今の機にかなはず、淨土門は淺きに似たれども、當根にかなひ易しといひし時、末法萬年餘經悉滅彌陀一教利物偏增の道理におれて人皆信伏しき。――《法然上人行狀畫圖》

と云つた。即ち末の世に及んでは凡ての經の教は皆滅びて、彌陀の教のみが世に利益を與ふべきであるといふのであるが、而も彌陀以外の佛を禮拜することを雜行として排斥するのであるから、釋尊を禮拜することをもせぬのである。釋尊の教を奉ずべき筈の佛徒が釋尊を全くさしをいて彌陀をのみ禮拜するといふのは何故であるか。日蓮上人が後年に至り、

教主釋尊は娑婆世界の衆生には主師親の三德を備へて、大恩の佛にて御坐す。此佛を捨て他方の佛を信じ、彌陀藥師大日等を憑み奉る人は二十逆罪の咎に依て惡道に墮つべきなり。――《念佛無間地獄鈔》

と斷ぜられた、その思想の萌芽は既に壯年時代に於て心の底に動いたことであらう。

駑馬を繫ぐ所の羈絆は永く天馬の足を繫ぎ止むるを得ぬものである。師は凡師であり、友とする者は盡く凡僧であつても、非凡なる天資を有する上人は、いつ迄も便宜的生活に甘んずることは出來ず、斯る根本的の疑問に心を苦むるやうになつたのである。此の疑問を解かんが爲には、根本的の研究をしなければならぬ、それには尋常の機根ではいかぬ。即ち『日本第一の智者』たらんことを望む所以である。清澄の山には虛空藏菩薩の廟がある。此の菩薩の像、左手には寶蓮華を持し華の上に如意珠玉寶あり、右手には寶劍を持す。劍は智德を表し蓮華は福德を表すといふ。今此の大願を發したる若き僧(その時の名は蓮長)は、此の虛空藏の廟に祈つて智を求めたのである。即ち

日本第一の智者

日蓮は安房の國東條の郷、清澄山の住人なり、幼少の時より虛空藏に願を立て云く、日本第一の智者となし給へと云々。虛空藏菩薩眼前に高僧とゞらせ給ひて、明星の如くなる智慧の寶珠を授けさせ給ひき。其しるしにや日本國の八宗並に禪宗念佛等の大綱ほゞ伺ひ侍りぬ。

——《善無畏三藏鈔》

生身の虛空藏菩薩より大智慧を給はりし事ありき。日本第一の智者となし給へと申せし事を不便とや思し食しけん、明星の如くなる大寶珠を給ひて右の袖にうけ取り候ひし故に、一切經を見候ひしかば、八宗並に一切經の勝劣ほゞ是を知りぬ。——《清澄寺大衆中》

と後に自ら記された所によつて、その當時の樣を知るべきである。『日本一の智者』となりたいといふのは、己が名聞の爲では無い。智なくしては釋尊の眞意を知ることは出來ず、それを知ることが出來なければ人を救ふことも世を導くことも出來ぬからである。上人が後に至つて、

佛敎をならはん者父母師匠國恩を忘るべしや。此の大恩を報ぜんに

報恩のため

は必ず佛敎をならひきはめ、智者とならで叶ふべきか、譬へば衆盲を導かんには生盲（いきめくら）の身にては橋河を渡り難し、方風を辨へざらん大舟は諸商を導きて寶山にいたるべしや。――《報恩鈔》

と記されたのに依つて、その志の存する所を知るべきである。此の虛空藏に願をかけて必死の祈りを捧げられたことは、その滿願の日に於て血を吐かれたといふ傳說によつても推することが出來る。天性の非凡なるに加へて此の熱心を以てしたのである、その結果は多言を用ゐずして明であらう。

十六年間の研究

是より三十二歲の春までの間、凡そ十六年間は上人の研究時代であつた。鎌倉に於ては淨土の名僧大阿に法を問ひ、京に於ては臨濟曹洞の敎をも學ばれたと傳へられてある。叡山に天台の敎を學び、更に三井寺に學び、去つて高野山に眞言を學び、更にまた天王寺に學んだことは、上人の自ら記する所によつて知られる。なほ國學についての研究をも積まれたと言ひ傳へられてあるが、今日に遺されたる上人の著書について考へると、その學問の該博にして、獨り佛敎のみならず、汎く和漢の學に亘つて究めざる無きの概がある、まことに驚嘆すべきである。固より或る一宗一派を固執して自己の勢力を張らうといふのでもなく、又故らに自ら異を立てゝ一派を開かうとするのでも無く、たゞ眞理を求めんが爲の研究であつたのであるから、其の態度は公平であり、その判斷は嚴正であり、ことに十六年を一貫したる熱心は非常なものであつたと想像される。斯る研究の結果として、法華經の敎に過ぐるもの無きことを確信せられたものである故に、たとへ如何なる迫害のあるも、『智者にわが義破られずは用ゐじ』と斷言して、更に動く所が無かつたのである。

得たる確信

法然善導等が書き置きて候ほどの法門は、日蓮等は十七八の時より知りて候ひき。この頃の人の申すもこれに過ぎず。――《南條兵衛七郎殿御書》

四十餘年未顯眞實

とあるは決して誇張の言では無い。

忠實に一切經を比べ讀んで研究した結果として、無量義經に『四十餘年未顯眞實』とて、今まで四十餘年の教は、まだ教の中途であつて最後の結論で無いとあるのが、いかにも尤と點頭づけて來た。隨て佛が說法の最後に於て『正直に方便をすてゝ、たゞ無上道を說く』と斷つて說き遺された法華經の教の最勝のものであることも疑へぬことになつた。しかし如何に貴い教でも、時によつては其の効の少いことがある。美しい綾の小袖も、夏は麁末な葛の單衣に及ばぬ。哲學者は眞理を究めるといふことだけを目的にする者であるから、時代に適すると否とに拘らず、たゞ驀地に眞理に向つて邁進すれば宜いのであるが、宗教は人を救ふことを目的とするのであるから、自分の教を以て今の世の人を救ひ得べきか否かを考へなければならぬのである。これ卽ち

末世の爲の法華經

夫れ佛法を學せん法は必ず先づ時をならふべし。――《撰時鈔》

の言ある所以である。然るに此の法華經はたゞに最勝の經であるのみならず、實に末法の世の人を救はんが爲に遺されたる教であつて、その時至れば必ず天下に流布すべきものである。しかも末法の世とは正に今の時である。こゝまで究め到つて、はじめて日蓮上人の決心は定まつたのである。安房の海邊の漁夫の子と生れ、凡師を師とし凡僧を友とし凡夫の中に長じたる日蓮上人が、釋尊の御使として、法華經を弘むべき使命を帶びて此の土に下られたことを自覺せられたのは此時より後である。

十六年の遊學を終り、故郷に歸つて己が悟り得た所を發表せんとするには、如何なる障碍に出逢ふも屈せぬだけの覺悟を定めての上でなければならぬ。後年上人が

生盲の者と、邪眼の者と、一眼の者と、各謂自師の者、邊執家の者は見難し。萬難をすてゝ道心あらん者にしるし止めて見せん。西王母が園の桃、輪王出世の優曇華よりもあひ難く、沛公が項羽と八年漢土を爭ひし、賴朝と宗盛が七年秋津島に戰ひし、修羅と帝釋と、金翅鳥と龍王と阿耨池に爭へるも此にはすぐべからずと知るべし。日本國に此法顯るゝこと二度なり、傳教大師と日蓮となりと知れ。無眼の者は疑ふべし、力及ぶべからず。――《開目鈔》

傳教と日蓮

と記されたる、その抱負、その決心は已に此時上人の胸中に存してゐたことゝ察せられる。

念佛者と法華經

一六　日蓮上人の事蹟――二、立正安國論

末世に及んでは人々惑を重ね罪を積むこと極めて深き故に、佛の遺されたる高尚なる教を理會して、身に行ひ人を導くことは到底出來ぬされば一切を思ひすてゝ彌陀の慈悲にすがれと、念佛者は說きすゝめた。然るに青年なる蓮長法師は之に對して疑を起した、而して久しい研鑽を積んだ末、その說の誤れることを確めた。釋迦の教は世が末になつて氓びてしまふやうな、そんな微力なものでは無い。一切の教が權威を失ふ時こそ、最も勝れたる教のはじめて光を放つべき時である。即ち法華經の教が世に弘まるべき時が來たのである。『現世安穩後生善處』と經の中に示されてある。法華經を信ずるものが一天四海に充つるに至れば、此の土の上に佛の國が打建てらるべきである、必ずしも西方淨土

に赴いてはじめて安樂の生を享くべしと考ふるには及ばぬ。斯る行末を思ひ浮ぶれば、眼前の世間がいかに淺ましい有樣であつても、決して絶望すべきでは無い。

怨敵必ず起る

しかしながら末の末までを洞見することは、聖賢にしてはじめて能くすべきである、世俗はだゝ眼前の事のみを見てその他を知らぬ。之に對して眞實の教を說けば之を怪み之を訝り、はては之を惡み之を嫌つて迫害を加へなければ止まぬ。その迫害に屈せずして、たゞ彼等を憫むの慈悲心を以て教を說く者を宛ら怨敵の如くに思ふ、これ世俗の常である。まして法華經の如き最も勝れたる教を說くものは、種々の迫害にあふべき覺悟が無ければならぬ。されば法華經の中にも、

佛滅度の後、恐怖惡世の中に於て我等當に廣く說くべし。諸の無智の人の惡口罵詈等し、及び刀杖を加ふる者有らん、我等皆當に忍ぶべし。

——（勸持品）

佛の御使

といふ如きことが幾度もくりかへされてある。しかし斯る迫害は顧慮すべきもので無い。世は末世である、即ち法華經の流布すべき初めの時である。然るに未だ之を說き弘めんとする者なくして、我のみ之を信ずるに至つたのは、之を弘むべき責が我身の肩にかゝつてゐるに違ひない。我はたゞ一人の法師蓮長でなく、正しく佛の御使である。斯く覺悟したればこそ、上人は故鄕に歸つて其の信ずる所を發表しやうと決心せられたのである。

四月二十八日開宗

此の決心を齎して安房の淸澄山に歸り、四月二十八日の曉をトして其の山巓の杉の木立の下に立ち、東の海よりさし上る旭日に對つて、はじめて唱へられたのは、即ち今に流布する南無妙法蓮華經の題目である。

日本國の中にたゞ一人南無妙法蓮華經と唱へたり、これ須彌山の始めの一塵、大海の始めの一露なり。――《妙密上人御消息》

といふは即ちこれである。安房の國は東海道の果であるが、其の海に斗出したる一角の地は波白く松翠くして、風光いふばかり無く美しい。その海邊につゞく清澄の山はさまでの高山では無いが谷深く木立茂つて、幽遂閑雅の趣に富み、まことに浮世の外なる境である。節は陰暦四月二十八日といへば、夏もやうやく半に近く、天も地も共にみどりの色に包まれたる時である。その晴れ渡つたる曉に、其の山の巓に立つて大洋を見渡したる壯年の僧は、一天四海を震ひ動すべき題目の第一聲を唱ふる人として、まことにふさはしい風采であつたらう。

斯くて同じ日に、其の悟り得た所を衆に向つて說き示されたのである。學成つて歸つた壯年の蓮長はいかなる有難い敎を說くであらうと、

第一の迫害

待設けた居た人々は、其の說き出す所を聽いて唯々驚きあきるゝより外は無かつた。殊に其地の地頭たる東條景信は無二の念佛の信者であつたが、蓮長が念佛を地獄に墮つべき業として排斥するのを聞いて大に怒り、危害を之に及ぼさんとした。師の道善房も是非なく之を清澄より逐ふことゝなつた。卽ち

建長五年四月二十八日安房國東條郡清澄寺、道善の房、持佛堂の南面にして淨圓房と申す者並に少々の大衆にこれを申しはじめて、其後二十餘年が間退轉なく申す。或は所を追出され或は流罪等、昔は聞く不輕菩薩の杖木等、今は見る日蓮が刀劍に當ることを。――《清澄寺大衆中》

といひ、また更に

日蓮一閻浮提の內、日本國安房國東條鄕に始めて此正法を弘通した

り、隨て地頭敵となる。――《新尼御前御返事》

といふは此の事實である。法華經の中に豫言せられた迫害は忽ち襲ひ起つたのである。

日蓮といふ名の由來

清澄から逐はれた蓮長法師は鎌倉に上つて弘通の途を開いたのであるが、此の大任を負うて生れた身であるといふ自信は、迫害によつて更に強まつたのである。こゝに於て蓮長の名を改め、更に日蓮の二字が選まれた。その由來は、

闇なれども燈入りぬれば明なり、濁水にも日入りぬればすめり。明なること日月にすぎんや、淨きこと蓮華にまさるべきや。法華經は日月と蓮華となり、故に妙法蓮華經と名く。日蓮また日月と蓮華との如くなり、信心の水すまば利生の月必ず應を垂れ守護し給ふべし。――

《四條金吾女房御書》

鎌倉の弘通

と自ら書かれた所によつてよく知られる。鎌倉へは五月のはじめに着いて、松葉ヶ谷の片隅に草庵を結ばれたのである。

其の頃鎌倉には建長寺に道隆あり、極樂寺に良觀あり、その外壽福寺、淨光明寺等多くの寺があつて、何れも武家百姓の歸依を受け、繁昌を極めて居た。しかし日蓮上人の眼から見れば何れも佛敎の本意を失つたものであつた。或は釋尊を措いて阿彌陀を拜し、大日を尊び、或は一切の尊い經をたゞ月をさす指にすぎず、月を知れば指は無用なりと云つて斥け互に我意につのり邪義に誇つて、末世にいかなる敎が功德を有するかを知らぬものである。其の過れることを明にして後、はじめて正しい敎が弘まるべきである。たとへば道を作るが如きである。先づ荆棘を刈り拂ひ、土を平にして、然る後に、石を敷かなければならぬ。他の誤りを知つて之を默して云はぬのは、慈悲の無いわざである。佛の弟子であり

ながら佛の慈悲を學ぶことをせず、他の人の誤りを知らず顔に過ぐるのは罪深きことである。卽ち

折伏の必要

日本國に此を知れる者但日蓮一人なり。此を一言も申し出すならば父母兄弟師匠國主の王難必ず來るべし、いはずば慈悲なきに似たりと思惟するに、法華經涅槃經等に此の二邊を合せ見るに、いはずば今生は事なくとも、後生は必ず無間地獄におつべし。いふならば三障四魔必ず競ひ起るべしと知りぬ。——《開目鈔》

斯く思惟して覺悟を極めたのであるから、もはや躊躇する所は無い。

されば松葉ヶ谷に居を定められた日蓮上人は、何人の保護もたのまず、何人の援助も假らず、單身鎌倉の街上に立つて、その信ずる所を大膽に語り、末世の我等はたゞ法華經によつて救はるべきこと、之を措いて顧みぬ諸宗の教の誤れることを、憚る所もなく論ぜられたのである。世

辻說法

にいふ『辻說法』とは卽ちこれである。何人も最初は顧みなかつた。やがて好奇心から歩を止めて聽く者も出來た。聽いて狂人として嘲る者もあつた、愚人の言として笑つてすぐる者もあつた。中には其の信ずる所の教を罵られて怒りくるふ者も出來て來た。說く人の熱心ます〳〵加はり、說く所の教がます〳〵痛切になると共に、聽く者の激昂もますます高まり、危害は幾度か上人の身に及ばんとした。しかし是は最初より覺悟したことである。惡口罵詈せられ刀杖を加へられ、瓦石を加へらるるのは、兼て經の中に豫言せられたことである。今更に驚くべきでは無い。

しかしながら人の心に佛性が具はつてゐる上は、いかに世が下つたればとて迷ふ者のみであらう筈がない。迫害の重る中に、動ずる所なく法を說く所の上人の熱誠に動されて、歸伏する者も漸く出來た。ことに

弟子日昭

松葉ヶ谷へ庵を結んだ年の冬に弟子日昭を得翌年の冬に弟子日朗を得られたのは非常なる喜びであつたらうと想像される。日昭は下總の人で、もと成辨といひ天台宗の僧であつた。叡山に在つて研究を積む内に種々の疑を生じ、終に來つて日蓮上人の御弟子となつたのであるが、年も上人よりは二歳の年長であり、學識も非常に高くあつたのに、わづかに一宗を開いたばかりで世上に名も知られぬ上人の御弟子となつたのが既に非凡な行である。師を信じ教を信ずること極めてあつく、日蓮上人の御身に如何なる危害が加はつた場合にも、更に驚き騷ぐことも無く、師の命を守つて專ら年少の弟子達を教育し、終始一貫師をして内敵の憂無からしめたるは偉大なる功績である。日朗は下總平賀の人で十二歳にして日蓮上人に隨身し、生涯誠心を盡して師に仕へた。いかなる艱難の場合でも必ず師に隨つて奉養を盡し、至孝の名を得た。又その

弟子日朗

歸依者の重なるもの

門に多くのすぐれたる弟子を出した。此の二人は盡す所互に表裏を爲して、共に門下の柱石と稱せらるべき人である。御弟子中で特に卓出した人を後世から六老僧と呼んでゐるが、その中でも此二人は又特別にすぐれた人々である。

此の外、俗人で歸依した人も少からずあつた。その中には富木胤繼とか四條頼基とか、進士善春とか、工藤吉隆とか、若くは池上宗仲とか、南部實長とかいふ人々もあつた。此等の人々はいづれも信仰あつく、如何なる場合にも退轉せずして生命にかけて弘通を輔けたる大功勞者である。殊に富木胤繼は日蓮上人よりも年長で、上人の遊學時代には保護を與へた人であつたが、建長六年に歸依したのである。六老僧の一人たる日頂はその養子である。斯く頼もしい弟子も出來、頼もしい信者も出來たのである。『德孤ならず』の古語はいつはりならず、上人は實に此時己

に、

天台傳教の御時は時いまだ至らざりしかども、一分の機ある故に少分流布せり。何に況んや今は已に時至りぬ。設ひ機なくして水火を成ずとも爭でか弘通せざらんや。只不輕菩薩の如く大難にはあふとも之を弘めば、流布せんこと疑ひなかるべし。――《諫曉八幡鈔》

の決心をもつて事に當られたのである。德に歸する者の漸く加はつたのも當然のことである。

天災地變

斯くして一二年を經るうちに、康元元年、即ち上人三十五歳の春より連年引續いて天變地妖頻りにして、人民の難儀は一通でなかつた。洪水あり、暴風あり、地震あり、大旱あり饑饉ありといふ有樣で、その慘狀は上人が

近年より近日に至るまで、天變地夭飢饉疫癘遍く天下に滿ち廣く地上に迸る。牛馬巷に斃れ骸骨路に充てり。死を招くの輩既に大半に超え、之を悲まざる族敢て一人も無し。……唯肝膽を摧くのみにして彌飢疫に迫り、乞客目に溢れ死人眼に滿てり、屍を臥して觀と爲し尸を並べて橋と作す。――《立正安國論》

と記されたるに依つて推すべきである。此時鎌倉の執權は北條時宗の筈であつたが、なほ幼年であつた爲に長時が之に代つて政をとり、大事は、時賴の裁斷を仰いで居た。時賴は最明寺入道として知られ、善政の譽の高い人である。されば種々と救護の道を講じ、又神佛に祈つて災を攘ふことをも務めたやうである。又極樂寺の良觀などは隨分大規模に救護の方法を立て、盡力をしたのであるが如何にしても手が屆かず、人民の困厄はます〳〵甚しきを加へたのである。

日蓮上人は深く之を悼み、いかにして之を救ふべきかと思ひ煩はれ

實相寺入藏

たのであるが、災難にあつた者を救ふよりは其難を止めることを考へるのが大切である。それについて思ひ當られたのは仁王經、藥師經等に出たる三災七難等の說である、即ち國民の信仰が亂るゝ時には種々の炎難が起るといふ說である。しかし之を申出すのは大事である故に、輕輕しくすべきで無いといふ所から、更に一層の研究をと思ひ立つて、正嘉二年の春駿州岩本の實相寺に赴いて藏經を通讀せられた。前にも已に通讀せられたのであるが、更に熟讀せられたことゝ思はれる。實相寺はこの時天台宗であつたが、後に日蓮宗となつた。此の研究の結果として、翌る正元元年に『守護國家論』が成り、その翌年即ち文應元年に『立正安國論』が成つた。

守護國家論

守護國家論は大體法然上人の『選擇集』を駁したものである。これは前に天台、華嚴の人々が選擇集に對する駁論を著はしたのを、なほ根本的で無いといふので此論を作られたといふことである。立正安國論に至ては實際上人の心血を濺いで書かれたもので、文應元年即ち上人三十九歳の七月、之を北條時賴に提出して、その反省を促したのである。即ち之を經文に考へて、

立正安論

世皆正に背き人悉惡に歸す、故に善神國を捨て相去り、聖人所を辭して還らず、是を以て魔來り鬼來り、災起り難起る。

と斷じ、その救治の道を敎へたものである。それは金光明經、大集經、藥師經、仁王經等に出てゐることであるが、藥師經に據て七難をいへば、第一に人衆疾疫の難、第二に他國侵逼の難、第三に自界叛逆の難、第四に星宿變怪の難、第五に日月薄蝕の難、第六に非時風雨の難、第七に過時不雨の難等である。斯る災難が如何にして來るかといへば、正を去り邪に向へる人心の感應によつて起るのである。天地萬有はその形相を異にすれ

ども其の根本に於て共通の性質を有し、共に生命を有するものとすれば、人と人との心に感應がある如く、人と物との間に感應のあるべきことを認むるのも不思議は無いわけである。

誤れる佛法

世に佛法は盛であるが、而も斯る災難の頻りに起るのは何の爲か。その所謂佛法が法然等の唱ふる所の佛法で、たゞ西方の彌陀を崇め『總じて一代の大乘六百三十七部、二千八百八十三卷、一切の諸佛菩薩及び諸の世天等を以て皆聖道難行雜行等に攝して、或は捨て或は閉ぢ或は閣(さしおき)き或は拋(なげ)つ』といふやうに、釋尊の本意を無視した教を弘むる故に、民心たゞ昏亂するのみである。その後寺の數も僧の數もます〳〵多くなつたが、仁王經に示す所の

諸の惡比丘多く名利を求め、國王太子王子の前に於て自ら破佛法の因緣、破國の因緣を說かんに、其の王別へずして此語を信聽し、橫に法制を作りて佛戒に依らず、是を破佛破國の因緣と爲す。

外敵侵入の豫言

の語にその儘である。斯の如くにして世の靜謐ならんことを求むるも得べからざる所である。

諸經の中に示されたる災難の中、已に世に現はれたものもあり、未だ現はれざるものもある、未だ現れざるものも、後にはやがて現はるべきである。即ち豫言して、

藥師經の七難の內、五難忽に起り、二難猶殘れり、いはゆる佗國侵逼の難、自界叛逆の難なり。大集經の三災の內、二災早く顯れ一災未だ起らず、いはゆる兵革の災なり。金光明經の內、種々の災過一一起ると雖も佗方の怨賊國內を侵掠する、此の災未だ露れず、此の難未だ來らず。仁王經の七難の內、六難今盛にして一難未だ現れず、いはゆる四方の賊來りて國を侵すの難なり。……先難是れ明なり、後災何ぞ疑はん。若し

殘る所の難、惡法の科に依て並に起り競ひ來らば其の時何んか爲んや。

と記されたのである。此の豫言は後に盡く適中して、時宗の兄時輔は文永九年に亂を六波羅に起した、又蒙古の襲來といふ大事件も起つた。されば上人は文永六年に至り、

文應元年より文永五年後の正月十八日に至るまで九箇年を經て、西方大蒙古國より我が朝を襲ふ可きの由牒狀之を渡す。又同六年重ねて牒狀之を渡す。既に勸文之に叶ふ、之に準じて之を思ふに未來も亦然るべき歟。此書は徵ある文なり。是れ偏に日蓮が力に非ず、法華經の眞文、聖の感應する所歟。

と記されたのである。

權門に阿らず勢利に附かず、特立獨行その信ずる所に邁進するのが

諫曉の理由

日蓮上人の本領である。然るに何が故に北條時賴に書を上つて之を諫めんとせられたのであるか。たゞ國を憂ふるの至情に出たものである。當時に於ては政權が武門に在つたのみならず、智識の程度も武士が尤も高かつたので、一般人民は武士の爲す所に倣ふより外は無かつたのである。故に一般の風儀を改めるには武門の棟梁なる北條氏を覺醒せしむるのが最も宜い道なのである。且又法華經の敎なるものは人々の來世を助けることのみを主としたものでは無く、此の娑婆世界を佛國土の如くせんことを目的とするものである。卽ち安國論にいはゆる、

國に衰微なく土に破壞なくんば、身は是れ安全にして、心は是れ禪定ならん。

といふ理想であるから、國の現狀について冷淡なることは出來ぬのである。人々皆正しい信仰の上に立てば、國は必ず治平すべきである。信仰

日蓮上人の大義名分論

が正しからずして思想が混亂してゐる故に、正邪善惡の分界もつかず、上下の別も亂れ順逆の理も明にならず、淺ましい事のみが起るのである。『法華を識るものは世法を得べき』である故にまづ法華を識らしめて、世法を正さなければならぬ。

日蓮上人が日本の國體を重んぜられたことは、その生涯に書き止められた所の多くによつて知るを得べきである。その一二の例をいへば、

我日本國は一閻浮提の內、月氏漢土にもすぐれ、八萬の國にも超えたる國ぞかし。——《神國王御書》

と斷言せられ、また

日本國の王となる人は天照太神の御魂の入りかはらせ給ふ王也、先生の十善戒の力といひ、いかでか國中の萬民の中にはかたぶくべき。

——《高橋入道殿御返事》

と申され此の天皇の稜威を侵し奉るものは、如何なる理由ありても赦すべからざるものとして、

日本國に代始りてより已に謀叛の者二十六人、第一は大山の王子、第二は大石の山丸、乃至第二十五人は賴朝、第二十六人は義時也。——《筒御器鈔》

と斷ぜられた。而してなほ

王となる人は過去にても現在にても十善を持つ人の名なり、名はかはれども師子の座は一つ也。——《妙法尼御返事》

とも云はれてある。即ち佛が師子の座に在て菩薩諸天等の恭敬を受くる如く王は王位を保つて庶民に奉仕せらるべきものといふのである。されば こそ、

世間を見るに各々我も我もといへども國主は但一人なり。二人とな

一佛一王

れば國土おだやかならず、家に二の主あれば其家必ずやぶる。一切經も又かくの如くやなるらん。――《報恩鈔》

とも云はれたので、即ち教に於ては釋迦といふ一佛を上に立てなければならず、國に於ては天皇といふ一王に從ひ奉らなければならぬのである。

斯く觀來れば、立正安國論を北條氏に示されたる眞意は自ら明であらう。念佛宗を信ずるのが惡い禪を信ずるものが惡いといふだけの問題では無い、その信仰を改むると共に凡てが改まらなければならぬのである。陪臣にして國政を恣にするの罪も自覺されなければならぬのである。それを平然として眺めてゐる者の罪も明になつて來べきである。一切のものが正しい信仰に入つて、一切の過が改められるゝ時、國土は初めて安穩なるべきである。

暴徒の夜襲

一七　日蓮上人の事蹟――三、大難四度

立正安國論は省みられずして終つた。しかし日蓮上人は更に屈せずして諸宗を折伏しつゞけられたので、之を怨み憎むものが黨を組み、上人の草庵を襲うたが、進士太郎等の防戰によつて上人は幸に難を免ることが出來た。然るに此の夜襲を行つたものは更に罪せられず、上人に對する憎怨の聲のみ日に高まり、翌弘長元年の五月執權長時の命によつて上人は伊豆の伊東に配流せらるゝことゝなつた。上人後に此の事を記して、

先づ大地震に付て去る正嘉元年に書を一卷註したりしを故最明寺の入道殿に奉る。御尋もなく御用も無かりしかば國主の御用なき法師なれば、あやまちたりとも科あらじとや思ひけん、念佛者並に檀那

等、又さるべき人々も同意したるとぞ聞えし、夜中に日蓮が小庵に數千人押寄せて殺害せんとせしかども、如何がしたりけん其の夜の害も免れぬ。然れども心を合せたる事なれば、寄せたる者も科なくて大事の政道を破る日蓮が生きたる不思議なりとて伊豆の國へ流しぬ。されば人の餘りに惡きには我が滅ぶべき科をも顧みざるか、御式目をも破らるゝか。御起請文を見るに、梵釋四天王、天照太神正八幡等を書きのせ奉る。余存外の法門を申さば、子細を辨へられずば日本國の御歸依の僧等に召合せられて、其に猶事ゆかずば漢土月氏までも尋ねらるべし。其に叶はずば、子細ありなんとて且く待たるべし。子細も辨へぬ人々が身の滅ぶべきを指し置て大事の起請を破らるゝ事心得られず。――《下山鈔》

早怯なる北條氏

と申されたのは如何にも尤千萬なことである。北條氏の定めた式目によれば罪科ある者を必ず罰すべきであるに、夜襲の徒を罪せず、却て罪なき上人を流すとは何事であるか。ことに上人は私意を以て諸宗を譏るので無いから、如何なる高僧碩德をも召出して對決せしめるが宜い、自分の方が間違つてゐると定まつて罪にあふのは致し方がない、その道を盡さずして遠流に處するのは不都合であるといふので、如何にも正正堂々たる主張である。

伊豆配流

伊東に流されて後のことは、その時懇に上人の御世話をして、無二の信者となつた船守の彌三郎といふものに、上人が遣はされた御書の中に委しく記かれてある。

日蓮去る五月十二日流罪の時、その津につきて候ひしに、いまだ名をも聞き及び參らせず候處に、船より上り苦み候ひき處に、懇ろにあたらせ給ひ候ひし事は何なる宿習（しゅくしふ）なるらん。過去に法華經の行者にて

船守彌三郎

渡らせ給へるが、今末法に船守の彌三郎と生れ替りて日蓮を愍み給ふかゞとひ男はさもあるべきに、女房の身として食を與へ、洗足てうづ其外さも事懇なること、日蓮は知らず不思議とも申す計なし。殊に三十日餘り有て、内心に法華經を信じ、日蓮を供養し給ふこと何なる事のよしなるやゞかゝる地頭萬民日蓮を惡み嫉む事鎌倉よりも過ぎたり。見る者は目をひき、聞く人は怨む。殊に五月の頃なれば米も乏しかるらんに、日蓮を内々にて育み給ひし事は、日蓮が父母の伊豆の伊東川奈といふ處に生れ替り給ふか。法華經第四に云く、及諸信士女、供養於法師と云々。法華經を行せん者をば諸天善神等、或は男となり或は女となり、形をかへ樣々に供養して助くべしと云ふ經文なり。彌三郎夫婦士女と生れて日蓮法師を供養する事疑ひなし――《船守彌三郎御書》

配所の生活

さて此地の地頭もはじめは上人を惡んだのであるが、病氣に惱んでいかにしても驗の無かつたのを、上人を請じて病氣が癒えたので大によろこび、六月以後は伊東に移られて、流人とはいひながら地頭の保護の下に安らかに生活を送られたさまである。上人は此事を彌三郎に報じ『此功德も夫婦二人の功德となるべし』と申された。

弘長二年は配所にて過されたゞその正月に書かれた『四恩鈔』の中には、斯る境遇に在て益々決心を固うせられたよしを細かに示されてある。古より正道を唱へて迫害にあへる人の例を數へて、

何に況や世漸く五濁の盛になりて候をや、況や世末代に入て法華經をかりそめにも信ぜん者の人にそねみ嫉まれん事は夥しかるべきか。故に法華經に云く、如來現在、猶多怨嫉、況滅度後云々。始に此文を見候ひし時は、さしもやと思ひ候ひしに、今こそ佛の御言は違はざりけ

法悦に充てる生活

るものかなと、殊に身に當て思ひ知られて候へ。

と書かれた。末世に法華經が弘まるならば、之を弘めはじむる人が無ければならぬ。その弘めはじむる人には必ず迫害の加はることを經の中に豫言されてある。今上人は度々の迫害によつて、愈々御自身に此の天職を負うたことの自覺を强うせられた。而も此の豫言が斯くも適中するを見ては、『末世に必ず此經が流布する』といふ豫言の後必ず適中すべきことをも信じなければならぬ。斯る希望に喜びを感ずる上は、配流の境遇も苦にはならぬ。

此身に學文つかまつりし事やうやく二十四五年にまかりなる也。法華經を殊に信じ參らせ候ひし事は、わづかに此六七年よりこのかた也。又信じて候ひしかども懈怠の身たる上、或は學文といひ、或は世間の事に障へられて一日にわづかに一卷一品、題目ばかり也。去年の五月十二日より今年正月十六日に至るまで二百四十餘日の程は晝夜十二時に法華經を修行し奉ると存じ候。其故は法華經の故にかゝる身となりて候へば、行住坐臥に法華經を讀み行ずるにてこそ候へ。人間に生を受けて是程の悦びは何事か候べき。――（四恩鈔）

まことに貴くも羨しい境界である。此の配流中に伊豆の韮山の郷士江川吉久も信者となつた。此の江川氏に就ては古來傳ふる所に誤がある、實は四條金吾頼基と親しかつた爲に上人の配流中御世話をするやうにといふ頼基の頼みによつて伊東の配所をおとづれ、上人の德に服して信者となつたのであると。これは江川家の當主英武翁の著者に親しく語られた所である。

弘長三年の二月に至り赦されて鎌倉に歸り、以前の草庵に入られた。配流前に得た信者の中に曾谷敎信、秋元太郎、大田乘明等の人々あり、又

小松原法難

儒者として當時に著れてゐた大學三郎も常に來て道を問うた。斯れば見すぼらしい名越の草庵も次第に賑うて來たさまである。翌る文永元年の八月、母君の病を問ふ爲に房州へ歸られた、父君は疾く世を去つて、母君は此時七十餘歳であつた。清澄の山を逐はれて安房の國を去られたのは三十二歳の夏であるが、十一年を隔てた今、四十三歳にして故郷の土を踏まれた上人の感慨は如何であつたらう。死に迫つた母君の病も上人の誠心通じて大に快くなつたので、意を安んじて暫く滯留せらるゝ内に、前々より怨を懷いた東條景信の爲に襲撃せられた。いはゆる小松原の法難とはこれである。上人自ら此時の事を記して、

念佛者は數十萬、方人多く候なり、日蓮は唯一人、方人は一人もこれなし、今までも生きて候は不可思議なり。今年も十一月十一日安房の國東條の松原と申す大路にして、申酉の時數百人の念佛等に待ちかけられ候て、日蓮は唯一人、十人ばかり、物の用にあふ者はわづかに三四人なり。射る箭は雨の如し、打つ太刀は電の如し。弟子一人は當坐に打取られ二人は大事のてにて候。自身も切られ打たれ、結句にて候ひしほどに、いかゞ候ひけん、打ちもらされて今迄は生きてはべり。いよ〳〵法華經こそ信心まさり候へ。――《南條兵衛七郎殿御書》

殉難者

とある。打たれたる弟子は鏡忍房である。此の危い所を天津の城主工藤吉隆が來り救うた爲に、幸に免るゝことを得たが、吉隆は深傷を負うて終に死んだのである。上人が同じ書の中に、

もし先立たせ給はゞ梵天帝釋四大天王閻魔大王等にも申させ給ふべし。日本第一の法華經の行者、日蓮房の弟子なりと名のらせ給へ、よも芳心なき事は候はじ。

と書かれたのは、そのまゝに此等の殉難者に告げられた言とも見るべ

きである。

翌年に至り鎌倉へ歸られて、なほ弘通に力を盡さるゝ内に、文永五年となつた。是より先、蒙古王忽必烈、支那を征服し朝鮮を從へ、わが國をも屬國としやうとして、使者に國書を持たせて吾が國に遣はしたが、この年の正月に到着した。此の使者は追ひ還されたが、此儘に濟まう筈は無いから、京でも鎌倉でも種々の風説が立ち、世の中はやうやく騷がしくなつて來た。これ正しく日蓮上人が立正安國論の中に豫言せられた所である。曩に上人が安國論を北條時頼に提出された時には宿屋入道の手を經たのである。此時は時頼已に死し、時宗執權の職に在つたが、前の緣により上人は宿屋入道に書を與へ、

蒙古の使

今年大蒙古國より牒狀これ有る由風聞す等云々。經文の如くんば彼國より此國を責めん事必定なり。而るに日本國の中には日蓮一人當に彼の西戎を調伏するの人たるべしと兼て之を知り、論文之を勘ふ。君の爲め國の爲め神の爲め佛の爲め內奏を經らるべき歟。

十一通御書

と申送られた。これは八月の事であるが、久しくして何の沙汰も無かつたので。十月に至り十一通の書を裁して、執權時宗その他に與へられた。時宗への書面には、立正安國論の豫言適中したる以上は、日蓮の言を用ゐ、正しき信仰に歸して外教を退くる計を立てよと勸め、此言の誤なきことを證するには諸宗の僧と對論して是非を分つに若くは無しとの旨から、

所詮は萬祈を拋て諸宗を御前に召し合せ、佛法の邪正を決し給へ。

と促し、之を結ぶに

敢て日蓮が私曲に非ず、只偏に大忠を懷くが故に、身の爲めに之を申さず、神の爲め君の爲め國の爲め一切衆生の爲めに言上せしむる所

也。

の言を以てした。更に宿屋入道、平左衛門尉及び北條彌源太にも書を與へて同じ趣意を告げ、なほ鎌倉中の最も有力なる七寺にも書を發せられた。七寺とは建長寺、極樂寺、大佛殿、壽福寺、淨光明寺、多寶寺、長樂寺等である。即ち諸宗の誤れることを責め、法華經に歸すべきことを勸め、且は之を明にせんが爲に對論せんことを促したのである。

弟子檀那を戒む

敢て諸宗を蔑如するに非ず、但此國の安泰を存ずる計りなり。

の一句に其の精神は盡されてある。しかし斯る剛直の言は如何なる危害を招がうも知れぬ。以前には特別の出來事が無くても流罪にあつたのである、此度は上人の一身のみならず、弟子檀那にまで迫害が及ぶかも知れぬ。故に上人は之と同日に書を弟子檀那に與へて覺悟を敎へられたのである。

大蒙古國の簡牒到來に就て、十一通の書狀を以て方々へ申せしめ候。定めて日蓮、弟子檀那、流罪死罪一定ならん、少しも之に驚くと莫れ。方方への强言申すに及ばず、是れ併なから强毒の故なり。日蓮庶幾せしむる所に候、各々用心あるべし。少しも妻子眷屬を憶ふこと莫れ、權威を恐るゝこと莫れ。今度生死の縛を切て佛果を遂げしめ給へ。

實に悲壯の言である、弟子檀那たるものの此の訓戒を受けて共に覺悟を固めたことであらう。然るに諸寺の僧一人として上人と共に對論して邪正を決せんといふ勇氣のある者も無く、さりとて妄りに迫害を加へることも出來兼て、事は其儘に寢んでしまつた。

行敏の訴

是より後二年許の間、上人の身には格別のことも無かつた。しかし蒙古の使が重ねて來たり、天災地變の年毎にあらはるゝ爲に世間は次第に騷がしくなるのみであつた。然るに文永八年の七月に至り行敏とい

ふ、僧が上人に對論を申入れたので、上人は幕府に於て對決しやうといふ返事を送られた。そこで行敏は上人のことを惡ざまに幕府に訴へたが上人は直ちに書を行敏に與へて其の主張を明に論辨せられた。茲に於て諸宗の僧は正面から議論を以て上人を屈服することは到底出來ぬと悟つて。尼御前達によつて上人を讒言した。此頃の習はしとして夫に先立たれた婦人は皆尼になつた。中には夫のある內から尼になつたのもある。地位ある婦人の尼になつたのが將軍や執權の奧向きに出入してゐる、これが大なる勢力をもつてゐた者である。此等の尼を通じて上人を惡ざまに訴へたのである。

僧等の讒訴

さりし程に念佛者、持齋眞言師等自身の智は及ばず、訴狀も叶はざれば、上臈尼御前達にとりつきて種々にかまへ申し、故最明寺入道殿、極樂寺入道殿を無間地獄に墮ちたりと申し、建長寺壽福寺極樂寺長樂寺大佛殿等を燒拂へと申し、道隆上人良觀上人等を頸をはねよと申す、御評定に何となくとも日蓮が罪禍まぬがれ難し。但し上件の事一定申すかと召出して尋ねらるべしとて召出されぬ。――《種々御振舞御書》

幕府の糺問

然るに此の訊問に對し、上人は『凡て仰せらるゝ通り相違なし、但し最明寺殿、極樂寺殿の地獄におつると申す事は此頃申し出したので無く、二人の殿が御存生の頃より申したことである』と答へ、なほ立正安國論に述べられた趣意をくりかへして述べられた。其の意氣に壓せられて、幕吏等は上人を囚へも得せず、その儘に放ち歸した。是は九月十日のことである、越えて十二日に至り上人は更に平左衞門尉に立正安國論を送つて熟讀をすゝめ、添ゆるに一書を以てせられた。

法を知り國を思ふの志尤も賞せらる可きの處、邪法邪教の輩讒奏讒

言するの間、久しく大忠を懷いて未だ微望を達せず。……早く賢慮を回らして須らく異敎を退くべし。世を安んじ國を安んずるを忠と爲し孝と爲す。是れ偏に身の爲めに之を述べず、君の爲め佛の爲め神の爲め一切衆生の爲めに言上せしむる所なり。

とは其の結末の語である。

然るに一旦は放つたものゝ此儘には差置かれぬといふ評議となつて、同じ十二日に士卒をさし向けて上人を捕へ、龍の口に引出して頭を刎ねるといふことになつた。その事の有樣も上人自ら記された所に詳である。

平左衞門大將として數百人の兵者に胴丸着せて烏帽子かけて、眼をいからし聲を荒うす。大體事の心を案ずるに太政入道の世をとりながら國を破らんとせしに似たり。たゞ事とも見えず。日蓮これを見て

思ふやう、日頃月頃思ひ設けたりつる事はこれなり、幸なるかな法華經の爲に身をすてん事よ、臭き頭を放たれば、沙に金をかへ石に珠をあきなへるが如し。さて平左衞門尉が一の郎從少輔房と申すもの走りよりて、日蓮が懷中せる法華經の第五卷を取出して、おもてを三度さいなみて、さん〳〵と打散す。又九卷の法華經を兵者ども打散して或は足にふみ、或は身にまとひ、或は板敷たゝみ等家の二三間に散さぬ所もなし。日蓮大高聲を放て申す、あら面白や、平左衞門尉が物にくるふを見よ、とのばら、但今ぞ日本國の柱を倒すよと呼ばはりしかば、上下萬人あわてゝ見えし。日蓮こそ御勘氣を蒙れば臆して見ゆべかりしに、さはなくして、是はひが事なりとや思ひけん、兵者共の色こそ變じて見えしか。《種々御振舞御書》

是より由井ヶ濱を引まはされ、夜に入て龍の口へついたのである。四條

龍の口の法難

金吾の兄弟四人は最期を見屆けやうと、共に馬の口にとりついて刑場へ來た。さて刑場にての有樣は如何であつたか。

此にてぞ有らんずらんと思ふところに、案にたがはず兵士ども打まはりて騷ぎしかば、左衞門尉(即ち四條金吾)申すやう只今なりと泣く。日蓮申すやう、不覺の殿原かな、これ程の悅びを笑へかし、いかに約束をば違へらるゝぞと申せし時、江の島の方より月の如く光りたる物、まりのやうにて辰巳の方より戌亥の方へ光りわたる。十二日の夜のあけぐれ、人の面も見えざりしが、物の光り月夜のやうにて人々の面も皆見ゆ。太刀取目くらみ倒れ臥し兵者おぢ怖れ、興さめて十町計りはせのき、或は馬より下りてかしこまり、或は馬上にうづくまれるもあり。日蓮申すやう、いかに殿原、かゝる大禍なる召人には遠のくぞ近く打よれや、打よれやと高々呼ばれども急ぎ寄る人もなし。さて夜あけばいかに〳〵、頸切るべくは急ぎ切るべし、夜明けなば見苦しかりなんとすゝめしかども兎角の返事なし。——《種々御振舞御書》

斯くて龍の口に死せざりし上人は、翌日相模の依智なる本間六郎左衞門の館に移され、こゝより佐渡へ配流の事となつたのである。依智よりの消息の中に、

御歎きはさる事に候へども、これには一定と本より期して候へば歎かず候。今まで頸の切れぬこそ本意なく候へ。法華經の御故に過去に頸を失ひたらば、かゝる少身のみにて候べきか。又數々見擯出と說かれて度々失にあたりて重罪を消してこそ、佛にもなり候はんずれば、我と苦行をいたす事は心がらなり。——《土木殿御返事》

とある。難にあひて愈盛なる上人の意氣を見るべきである。

一八　日蓮上人の事蹟——四、半生の回顧

佐渡配流

九月は依智で過ぎ十月十日に至て、いよ〳〵佐渡へ遷さるゝことゝなつた。此時日朗等五人は土の牢に打込まれて居た故に、書を與へて之を慰め、又太田左右衞門尉等の信者にも激勵の爲に書を與へられた。とに日朗に與へられたる所謂『土牢御書』は、上人の慈悲溫情溢るゝばかりなる一面を遺憾なくあらはしたものである。『高山には泉多く偉人には涙多し』とバークの言つたのはまことである。

日蓮は明日佐渡の國へまかるなり。今夜の寒きにつけても牢の内のありさま思ひやられて、痛はしくこそ候へ。あはれ殿は法華經一部を色心二法共にあそばしたる御身なれば、父母六親一切衆生をも助けたまふべき御身なり。法華經を餘人のよみ候は、口ばかり言ばかりはよめども心はよまず、心はよめども身によまず。色心二法共にあそばされたるこそ貴く候へ。天諸童子、以爲給使、刀杖不加、毒不能害と說かれて候へば、別の事はあるべからず。牢をばし出させ給はゞ、とく〳〵來り給へ、見たてまつり見えたてまつらん。

越後寺泊

斯くて十日に依智を立ち、二十一日に越後の寺泊に着かれたが海荒れて船を出し難きために暫くこゝに滯留することゝなつた。陰曆の十月は已に冬の半である、ことに北の海の冬は寂しく凄まじい景色である上人御歳已に五十である、龍の口に死を免れて今また此の荒海へ流され、生きて歸らんことは固より期すべからざる事である。而も上人は胸に限なき悅びを蓄へて居られた故に、意氣更に衰ふる所も無かつた。こより富木氏に與へられた書に、

今月十日相州愛京郡依智の鄉を起て、武藏國久目河の宿につき、十二

日を經て越後國寺泊の津につきぬ。此より大海を亘て佐渡國に至らんと欲するに、順風定らず、其の期を知らず。道の間の事、心も及ぶことなく、莫く又筆にも及ばず、暗に推し度るべし。又本より存知の上なれば始めて歎くべきに非ずと之を止む。――《寺泊御書》

佐渡の塚原

とあるによつて、其の有樣を推すべきである。

さて佐渡へは二十八日に着いて松ヶ崎に上陸し、それより峠を越えて塚原に至り、こゝの三昧堂に落着かれたのは十一月の朔日であつたと思はれる。塚原は森林に圍まれて日の影もろくに漏らぬやうな濕地である。しかもその堂の有樣はといへば

里より遙にへだゝれる野と山との中間に、塚原と申す御三昧所あり、彼處に一間四面の堂あり、室は板間合はず四壁やぶれたり。雨はそとの如し、雪は內に積る、佛はおはせず莚疊は一枚もなし。――《妙法尼御返事》

法華經の豫言適中

といふが如き體であつた。こゝに十一月の朔日から翌年四月のはじめ迄住まれたのである。

こゝに至て顧みると、法華經の中に豫言せられたことが盡く上人の御身に實現されて居るのである。法華の行者に敵の多かるべきことは前にも云つたが、その迫害の類を經の中にあげて、『惡口罵詈せらるゝ』といひ、『刀杖を加へらるゝ』といひ、『杖木瓦石を以て打擲せらるゝ』といひ、又『數々擯出せらるゝ』と云つてある。また法華經の行者に敵するものゝ類をあげて、『俗衆增上慢』といひ、『道門增上慢』といひ、『僭聖增上慢』といひ、妙樂大師は此の第三最甚しと云つた。日蓮上人が開宗以來出逢はれた大小の難は此等の條件を盡く充してゐる。又俗人にして其の誤れる信仰に誇り、上人に迫害を加へるもの、即ち俗衆增上慢のもの、僧侶にして誤れる信仰に誇つて上人を迫害する、道門增上慢のもの、及び

數々見擯出

世に高僧の名を博し自らも高徳の者と僭稱して、而も正しい教を知らず、法華の行者を迫害する、僭聖增上慢の者も皆打揃つて現はれた。就中注意すべきは、『數々擯出せらる』の語である。日蓮上人の流罪に處せられたのは一度ならず、二度となつた、斯くてはじめて『數々』の語に合するのである。

經に云く、有諸無智人、惡口罵詈等。加刀杖瓦石等云々。今の世を見るに、日蓮より外の諸僧、たれの人か法華經につけて諸人に惡口罵詈せられ、刀杖等を加へらるゝ者ある。日蓮なくば此一偈の未來記は妄語となりぬ。惡世中比丘、邪智心諂曲。又云く、與白衣說法、爲世所恭敬、如六通羅漢。此等の經文は今の世の念佛者禪宗律宗等の法師なくば、世尊は又大妄語の人。常在大衆中、乃至向國王大臣婆羅門居士等。今の世の僧等日蓮を讒奏して流罪せずば此經文むなし。又云く數々見擯出等云々。日蓮法華經の故に度々流されずは數々の二字いかんがせん。此の二字は天台傳教も未だよみ給はず、況や餘人をや。末法の始のしるし恐怖惡世中の金言のあふ故に、但日蓮一人これをよめり。——《開目鈔》

諸天善神の加護

と上人の自ら記されたのは尤である。

しかし法華經の中には、此の經を信ずるものに迫害の加はるべきことが明されてあるのみならず、之に種々の加護あるべきことも亦明に說かれてある。即ちその一二を引いて見ると、

若し我が滅度の後に能く此の經を說かん者には、我化の四衆、比丘比丘尼及び淸信士女を遣はして、法師を供養せしめ、諸の衆生を引導して、之を集めて法を聽かしめ、若し人惡刀杖及び瓦石を加へんと欲せば、則ち變化の人を遣はして之が爲に衞護と作さん。——《法師品》

とは佛の明に約せられた所である。また

天の諸の童子以て給使を爲さん、刀杖も加へじ、毒も害すること能はじ。――《安樂行品》

とも、若くは

諸天晝夜常に法の爲の故に、而も之を衞護す。――《安樂行品》

ともある。即ち如何なる害を受けても、之が爲に打負けてしまふこと無く、必ず之を脱して更に活動の途が開かるべきことが約束せられてあるのである。こゝに末法の世のはじめに弘通の魁を爲す所の人が、中途にして斃れてしまつたら、折角開けた機運はまた閉ぢられてしまはなければならぬ。されば日蓮上人御自身には身命を惜まざるの決心を以て事に當られたとしても、迫害の爲に斃れてしまはれては、その身に負はれた使命も空しくなるわけである。然るに四度の大難にも障りなく生きて此の島へ着かれたのである。凡そ此の世の中の如何なる力を以

上行の再誕

ても、上人の御身に禍することは出來ず、上人の活動を阻止することは出來ぬのである。法華經の中の豫言は決して空言では無かつた。

今はもはや疑ふべき所も無い。法華經の神力品の中には、大地より涌出したる諸菩薩の上首たる上行菩薩に對して、釋尊が特に『末世に出て此の敎を弘むべきこと』を命ぜられたる文がある。其の上行菩薩はこゝに安房の片隅なる漁父の子となつて出現せられたといふことを、もはや誰も疑はぬであらう。されば上人御自身にも、

火は燒照すを以て行と爲し、水は垢穢を淨むるを以て行と爲し、風は塵埃を拂ふを以て行と爲し、又人畜草木の爲に魂となるを以て行と爲す。大地は草木を生ずるを以て行と爲し、天は潤すを以て行と爲す。妙法蓮華經の五字も又是の如し、本化地涌の利益是なり。上行菩薩末法今の時、此法門を弘めんが爲に御出現これ有るべき由、經文には見

え候へども如何候やらん。上行菩薩出現すとやせん、出現せずとやせん。日蓮先づ粗弘め候なり。――《生死一大事血脈鈔》

と、佐渡に來てはじめて斷言せられたのである。いかなる曲折があらうとも、末には必ず此の法の世界に弘まるべきことは『大地を的とする』ものである。

日蓮は聖人にあらざれども、法華經を說の如く受持すれば聖人の如し。又世間の作法兼て知るに依て注し置くこと是れ違ふべからず。現世に云ひ置く言の違はざらんをもて、後生の疑をなすべからず。――《佐渡御書》

の言も決して誇張ではない。

斯く上行菩薩の弘め給ふべき法華經を弘むるぞといふ自覺は、如何ならん艱苦にも屈すまじき大勇猛心を生ずるものである。一間四面の

得意の境

板屋に住んでも、意氣は天をも衝くべきである。今吾々が讀んでも感激せずには居られぬ、

強敵を伏して始めて力士を知る。惡王の正法を破るに邪法の僧等が方人をなして智者を失はん時は、師子王の如くなる心をもてる者必ず佛になるべし。例せば日蓮が如し。これ傲れるにはあらず、正法を惜む心の强盛なるべし。《佐渡御書》

の語は、斯る艱苦の中に發せられたものである。しかし斯の如き大抱負を有せらるゝ日蓮上人は、一面に於てまた極めて謙遜なる人であつて、深く自ら責め自ら抑へてゆるす所なき人であつた。之を知るに於ては、上人の偉大なることが更に强く感ぜらるゝであらう。

上人は末世に法華經を弘通すべき大任を負うて此世に出られたのであれば、正しく上行の再誕とも見らるべきものであるが、しかし人の

滅罪の爲の艱苦

身を受けて此世に出られたのである。人の國に生れ、人の世に育せられ人の手に長じ、人の教を受けて世に立つに至つたのである。されば人の子として自ら顧みる時に、人として共通の運命に服從しなければならぬことを感ぜられた筈である。佛の使としては、凡ての迫害を上に云ふやうに解釋して宜いが、人の子としては、之を『過去の罪惡をつぐなふ爲』と解釋してはじめて正しき意義を有するのである。法華經の中には、不輕菩薩が凡ての人にあふ毎に之を禮拜して、『我敢て汝等を輕しめず、汝等皆當に作佛すべし』と云つたことが記されてある。而して人々が之に對して惡口を加へ瓦石を擲つても、更に怒らずして之を忍ばれたとある。而してその末に、

不輕菩薩

其の罪畢へ已つて、命終の時に臨んで、此の經を聞くことを得て、六根清淨なり。神通力の故に壽命を增益して、また諸人の爲に廣く是の經を說く――《常不輕品》

とある。『その罪畢へ已つて』とは、不輕菩薩が過去に積來つた罪を、種々の迫害を忍ぶことに依つて償ひ終つたとの意である。日蓮上人は不輕菩薩の爲す所を學ぶことを志とせられて、『日蓮は則ち不輕菩薩たるべし』と明言せられた。即ち斯る立場から其の多くの迫害を解釋して、

日蓮上人の宿業

我無始よりこのかた惡王と生れて法華經の行者の衣食田畠等を奪ひ取りせしこと數を知らず、當世日本國の諸人の法華經の山寺を倒すが如し。又法華經の行者の頸をはぬること其數を知らず。此等の重罪、果せるもあり、未だ果さゞるもあらん。果すも餘殘いまだ盡きず。生死を離るゝ時は必ず此の重罪を消しはてゝ出離すべし。……今日蓮强盛に國土の謗法を責むれば、此の大難の來るは、過去の重罪の今生の護法に招き出せるなるべし。――《開目鈔》

と云つて居られる。過去の重き罪を償はざれば佛となることは出來ぬ、それを償はん爲には大難にあひて能く之に堪ゆることが必要である。若しいつ迄も難にもあはず、平凡無事の日を送るのみならば、いつ迄も罪を償ふことが出來ぬであらう。然るに今法華經の爲に力を盡す故に、その功德によりて多くの艱難に出合ひ、之によつて罪を償ひ得るのである。されば

功德によつて難を招く

また

鐵は炎ひ打てば劍となる、聖賢は罵詈して試みるなるべし。我今度の御勘氣は世間の失一分もなし。偏に先業の重罪を今生に消して、後生の三惡を脫れんずるなるべし。――《佐渡御書》

とも言はれたのである。而して多くの難が一時に起つのは、多くの罪を一時に消し得べき所以であると、巧なる譬喩を以て之を說明せられた。譬へば民の鄕郡なんどに在るには、いかなる利錢を地頭等におほせたれども、いたくも責めず、年々にのべ行く、其所を出る時に競ひ起るが如し。《佐渡御書》

村を去つて市へ移るには、村に在つた時の負債を皆つぐなつて行かなければならぬ、吾々が佛になる爲には、凡ての罪を償ひ終らなければならぬ、その爲の大難だといふのである。日蓮上人の如き大人物でも斯く自らかへりみ自ら責められたのである。自分の小き才覺に誇り、小き權勢を恃み、更に反省することを知らぬものは、幾許の經論を暗んじたとて、何で佛の境界に近づくことが出來やう。

斯く觀じ來る時はいかなる艱難も物の數でない。難にあふに依つて過去の罪を消し、難にあふに依つて法華經の豫言を實にし、以て自ら成佛の道を得ると共に、凡ての世の人を此の正しき道に誘ひ得べきである。まことに忝い事の限りである。

甘露の涙

現在の大難を思ひ續くるにも涙、未來の成佛を思ふて喜ぶにも涙せきあへず。鳥と蟲とはなけども涙おちず、日蓮はなかねども涙ひまなし。此なみだ世間の事にはあらず、たゞ偏に法華經の故なり。若ししからば甘露の涙とも云ふべし。――《諸法實相鈔》

常寂光の都

とは、斯る境遇に在る上人の心の底より出たる聲である

一九　日蓮上人の事蹟――五、佐渡が島

絶海の孤島に冬を送つて、嚴しい寒さを凌ぎ、身に迫る饑餓を凌いで御身に何の障りの無かつたのは不思議でない。『豈有他繆巧、陰陽不能』と文天祥の云つたのはまことである。上人また自らその懷を叙して、

切初より以來、父母主君等の御勘氣を蒙り、遠國の島に流罪せらるゝ人、我等が知く悅び身に餘りたる者よもあらじ。されば我等が居住して一乘を修行せん處は、何れの處にても候へ、常寂光の都たるべし。――《最蓮房御返事》

塚原問答

と云はれた。斯る中にも法敵はなほ絶えず、阿彌陀佛の大怨敵たる日蓮を殺せよと、計をめぐらす者もあつたが、領主たる本間六郎左衞門は依智の館へ上人を預つて以來、こゝでも充分の用心を加へて居たので、人々の無謀な企てを止め、『それよりも法門を以て責めるが宜い』と云つて之を制した。人々も納得して、多くの同勢を呼び集め問答を開くことになつた。それは翌文永九年正月のことである。

念佛者等或は淨土の三部經、或は止觀、或は眞言等を小法師等が頸にかけさせ、或は腋にはさませて、正月十六日にあつまる。佐渡の國のみならず、越後越中、出羽奥州、信濃等の國々より集れる法師等なれば、塚

原の堂の大庭、山野に數百人、六郎左衞門尉兄弟一家、さならぬもの百姓の入道等數を知らず集りたり。――《種々御振舞御書》

誤つた信仰とはいひながら、雪の深い中を國々から此の島に集つて來た熱心はまことに感ずべきである。今の世に法華の信者と稱するもので、是だけ眞面目な者がどれ程あるであらう、互に顧みなければなるまい。さて斯の如く勇ましい有樣で押寄せたのであるが、問答の結果はさて止觀眞言念佛の法門一々に彼が申す樣を牒しあげて承伏せさせては、ちやうと詰め〳〵一言二言にはすぎず。鎌倉の眞言師、禪宗念佛者、天台の者よりもはかなき者共なれば、只思ひやらせ給へ。利劍をもて瓜をきり、大風の草を靡かすが如し。――《種々御振舞御書》

と書かれたのに盡きてゐる。なほ此の事に前後して最も熱心なる弟子を二人まで新に得られたのは、記憶すべきことである。

遠藤爲盛

最蓮房

其の一人は遠藤爲盛、一人は最蓮房である。遠藤爲盛は彼の順德院の佐渡へ遷され給うた際に御伴をして來た一人であるが、仁治三年院の崩御になつた後剃髪して阿佛房と號し、日夜御追善の爲に念佛を怠らなかつた。その妻はやはり院に御仕へ申した女房であつたが、これも髪を剃つて千日尼と云つた。阿佛房は此時已に非常な老年であつたが、その信仰する阿彌陀佛を敵とする僧が來たと聞いて大に憤慨し之を殺害しやうと思ひ立つたが兎も角も其の說を聽いての上にしやうと思ひかへして、日蓮上人を尋ねて種々詰問に及んだが、上人の敎を受けて飜然として其の過を悟り妻と共に上人に歸伏したのである。後年上人が身延山に入らるゝに及んで、九十に近い老軀を以て三たびも態々參て敎を受けたといふ、まことに感ずべき人である。最蓮房は元來天台宗の僧で、事によつて此の島に配流されて居たのであるが、上人の德に服

して御弟子となつたのである。これは學も深く且信心も篤かつたので、上人も大に喜ばれたと思えて、後にその問に對して

賢人は金の如く愚人は鐵の如し、貴邊豈に眞金にあらずや。……殊に生死一大事の血脈相承の御尋、先代未聞の事なり、貴し貴し。――《生死一大事血脈鈔》

とまで推稱せられた。此人も後に赦されて歸り、身延山へ赴いて上人に仕へたやうである。佐渡の島の果てへ來ても、法の貴さに異りは無く、斯る優れた人達の歸依を得られたことは大なる喜びであつたに違ひない。

此の文永九年の二月には『開目鈔』を著はされた、是は上人の一生數多き著作の中でも特に重要なるものゝ一である。釋尊は凡ての人の依據すべき教を示されたる故に何人も之を師と仰ぐべきであるが、また

一切衆生を悉く吾が子と見て之を救護すべきことを志とせちるゝ所よりいへば、即ち凡ての人の親である。また其の貴きことは一切の者が仰いで主君として仕ふべきものである。

夫れ一切衆生の尊敬すべき者三つあり、所謂主師親これなり。

の語を以て書き起された『開目鈔』は即ち釋尊の世に出たまへる本意を明にせんが爲である。而して之を說くに先だつて、

又習學すべきもの三つあり、所謂儒外内これなり。

と、孔子老子の教から印度の諸の外道の教の要領を述べて、いづれも佛說に及ばざることを明にし、

一代五十餘年の說教は外典外道に對すれば大乘なり、大人の實語なるべし。初成道の始より泥洹の夕にいたるまで說くところの所說皆眞實也。

と斷じ、それより五十年の說教中なほ種々の區別のあることをあげて、

但法華經計り教主釋尊の正言也、三世十方の諸佛の眞言也。

といひ、諸經の內容を比べて之を論證したのである。

此書の性質

しかし法華經が如何に勝れたる經であつても、その末世に流布すべきことが明でない間は、之を心から信じやうとする者も出ぬ筈である、現に念佛門の人などは『法華經の優れた經であることは認めるが、末世の人は左樣にむづかしい教では救はれぬ』と云つて之を排斥するのである。日蓮上人は必ず法華經が末世に弘まるべきことを信じて、之が爲に半生の奮鬪を續け、法華經に豫言せられた所の凡ての迫害を經驗せられ、而もまた法華經に示さるゝ如く諸天の加護によつて御身に障りなきを得たのである。若し日蓮上人の御身に斯る事實がないならば、佛の經中に豫言せられた所は凡て外れ『世尊は大妄語の人』となるわけであつて、今斯く佛の豫言の當つたのを見ては、『やがて此經が末世に弘まるに違ひない』といふ豫言に對する信認も固まるべきわけである。

佛の說法の目的

當世法華の三類の强敵なくば誰か佛說を信受せん、日蓮なくば誰をか法華經の行者として佛語を助けん。

といふは此の意である。『開目鈔』は冷なる談理の書ではない、上人が自ら體驗せられた所を其のまゝに抒べて文字としたものである。

佛が一切の經を說かれた目的は要するに『衆生をして佛知見を開かしめんと欲する』に在る、即ち『一切の衆をして我が如く等くして異ること無からしめんと欲す』といふに在る。しかし此の目的に達せんが爲に種々の方便をも說き、法華經に至てはじめて眞意を說きあらはされたる故に、『我が昔の願せし所の如き、いま已に滿足しぬ』とこゝではじめて申されたことである。而して日蓮上人は之を他の諸經に比べて

此に予が愚見をもて前四十餘年と後八年との相違をかんがへ見るに、其相違多しといへども、先づ世間の學者もゆるし我が身にもさもやと打覺らる事は二乘作佛、久遠實成なるべし。

と斷ぜられた、二乘とは聲聞と緣覺である、共に煩惱を脱して悟を開きながら、他を救はんといふ心なく、自ら悟つて自ら足れりとする者である故に、佛とはなれぬのである。いづれの經の中にも二乘は佛になれぬと云つて排斥してあるのに、たゞ法華經を信ずる力によつてのみ佛になり得らるゝことが示されてあるのである。又佛の性質を說き、力を說き德を說いた文は諸經の中に多くあるが、法華經の壽量品の中に佛が無限の遠きむかしから既に佛であつたことを說示された語は、此等諸經に說かるゝ所よりも最も根本的である。二乘作佛を示されし故に、佛の大慈悲がこゝで初めて充分に分るのである、久遠實成を示されし故に。佛の本性がはじめて遺憾なく分るのである。之を諸宗の人々が明に認めずして、悉に說を立つる故に日蓮上人は奮て之に折伏を加へらるのである。而して此の貴い教を末世の人の爲に殘されたのを、『末世には行はれぬ』と誣ゆるは尤も不都合な說である。されば

未來に法華經を弘めて未來の一切の佛子に與へんと思召す御心の中を推するに、父母の一子の大苦に値ふを見るよりも强盛にこそ見えたるを、法然痛はしとも思はで、末法には法華經の門を堅く閉て人を入れじとせき、狂兒をたぼらかして寶をすてさするやうに、法華經を拋てさせける心こそ無慚に見え候へ。

と云はれたのである。此の法華經を佛が說かれた本意を明にし、末世に弘通の魁として現はれたる上人御自身の覺悟を述べ、世人の昏める目を開いてやらうといふのが『開目鈔』の書かれた趣意である。されば開

目鈔の文は眞に光焔萬丈で、何人も之を讀んで動されぬものは無い。

此の年の四月に至り上人は塚原から二里餘りある一谷（いちのさは）に移られた。

一ノ谷に移る

此處は山と山との間ではあるが、日當りもよく晴々したところで、塚原の陰氣なのとは比ぶべくも無い。且此の地方にも德に懷いて其の敎に歸依するものが少しは出來たさまで、同じ謫居とはいひながら餘程暮しよくなられた事と思はれる。斯くてこの年は格別の事もなく暮れて、翌文永十年の四月に至り『觀心本尊鈔』が成つた。略して斯う呼ぶが、具には『如來滅後五五百歲始觀心本尊鈔』といふのである、此の題號だけでも其のいかに重要の著であるかは明であらう。之を下總の富木氏へ送らるゝ際の副狀に『此事日蓮當身の大事也』とあり、更にまた

觀心本尊鈔

佛滅後二千二百二十餘年未だ此書の心有らず、國難を顧みず五五百歲を期して之を演說す。

と記されてある。

一念三千

觀心本尊鈔は吾々が信仰の對象として仰ぐべき所の本尊を如何に定むべきかを明されたものであつて、後に圖を以て書き現はされたる本尊（即ち此年七月にはじめて、圖せられたる曼荼羅）は此の鈔の意を表現せられたものである。此の問題を解く爲には『一念三年』の敎を明にしなければならぬ。『一念三千』は實に天台哲學の骨子である。天台大師が法華經を釋せられたのは單なる解釋では無くて、法華經を中心として一切經の精髓を取つて組織したる哲學系統である。天地萬有はそれぞれに其の形相を異にし、その作用を異にしてゐるけれども、全く相異るものとては一つも無く、實は互に他の凡ての性質を具有してゐるのである。而して此等の無限の性質、無限の形相、無限の作用は悉く本佛の不思議なる力の現はれたるものに外ならぬのである。此の無限のもの

を大別して十とする、即ち地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、聲聞、緣覺、菩薩、佛の十界がこれである。更に之を細別すれば三千となる。(委しくは後の章にいふ)而も互に他の凡ての性質を具有するのであるから、吾々の此の一心にも三千の悉くを具へてゐる筈である。吾々に佛性が具はつてゐる故に佛になることが出來ると同じく、他の物も佛に成ることが出來るわけである。即ち

國土世間亦十種の法を具す。――《摩訶止觀》

乃ち是の一草一木一礫一塵、各一佛性、各一因果あり緣了を具足す。

――《金錍論》

等の語ある所以である。因て日蓮上人は

觀心とは我が己心を觀じて十法界を見る、是を觀心といふ也。

と斷ぜられたのである。

佛性

前にも云つたやうに釋尊が世に出て敎を說かれた目的は『衆生をして佛の知見を開かしめんと欲する』に在るのであるが、釋尊いかに大悲慈を以て吾々に臨みたまふとも。吾々に佛となるべき本性が具はらずば之を導いて悟に入らしむることは出來まい。故に天台大師は

若し衆生に佛の知見なくんば、何ぞ開を論ずる所あらん。當に知るべし佛の知見の衆生に蘊在することを。

と云つたのである。但し衆生に佛性が蘊在するとも、之を開いて展びしむることと無ければ、いつ迄も佛になることは出來ぬであらう。本佛の慈悲は限なく洪大であるが故に、人身を受けて印度の淨飯王の子と生れ、衆生の爲に其の佛知見を開かしむべき道を、說き示されたのである、之を呼んで釋迦牟尼佛といふは梵語である、譯していへば能仁寂默である。法華文句に天台大師が

釋迦牟尼佛

寂默の故に生死に住せず、能仁の故に涅槃に住せず。

と説明された。寂默とは何事の爲にも動されぬのである、故に生死の變化ある此の世に在ても之が變化の外に超然たることを得るのである。しかし自ら物外に超然たるのみでは無い、凡ての者の苦むのを我が苦として憫み哀むところの大なる仁愛心ある故に、その悟り得た所に住(とどま)らずして、生死の變化ある世に出て此の世の人の爲に身を勞し心を勞し、以て教を垂れたまふのである。其の教の神髄とも魂(たましひ)ともいふべきものが法華經に説かれた所の教なのである。

されば妙法蓮華經とは經の名であると共に、經によつて吾々に遺されたる教の名である、教の中に含まれたる眞理その物である。而して此の眞理は即ち本佛の力の現はれたものゝ全體を含む故に、妙法蓮華經とは本佛の不思議なる力その物をいふとも見られる、又此の力の現はれたるものゝ全體即ち十界を指していふとも見られる。斯る奥深い意義を含んだ妙法華蓮經である故に、吾々は此の五字を唱ふることに依つて、之を通じて佛と相接することを得るのである。たとへ一念三千の哲理を學び知らずとも、此の五字を通じて佛と相接し、吾が具へたる佛性を開發し得べきである。即ち日蓮上人が

釋尊の因行果德の二法は妙法蓮華經の五字に具足す、我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功德を讓り與へたまふ。

といひ、更にまた

一念三千を識らざる者には佛大慈悲を起し、妙法五字の袋の内に此珠を裹み末代幼稚の頸に懸けしめ給ふ。

といはれたのは、此の意である。

『觀心本尊鈔』に於ては此の一念三千の深理よりはじめて、佛と十界

と吾々との關係を明にし、法華經と諸經との關係に及び、更に此の法華經の教の世に弘まるべき時が正しく今後に在ること、即ち末法の世に在るべきことを論證して、

一閻浮提第一の本尊此國に立つべし、月支震旦未だ此の本尊ましまさず。

開目鈔と本尊鈔

と斷ぜられたのである。此の書と開目鈔とは獨り佐渡在島中の二大作であるのみならず、上人御一代を通じて最も重要なるものである。但し此の書は開目鈔に比べて、論證及び研究に屬する部分を多く含んでゐる故に、彼書の如く壯烈激越の文字は多からず、沈着重厚の趣を以て勝つてゐる。彼の文は滄海の如く、此の文は名山の如しとでもいふべきであらうか。

斯くて此の年、文永十年七月八日に至り、此の觀心本尊鈔の義に基き之を圖として書きあらはされたのが即ち今に傳はる曼荼羅の始めである。勿論曼荼羅はむかしから有る、法華經の深い教義を圖に現はした曼荼羅は是が始めなのである。曼荼羅といふのは梵語で、之を漢語に譯せば『壇』といふことである。こゝに多くの佛を祀つてある故に『諸佛聚』といひ、その諸佛は皆功德を具へたものであるから『功德聚』ともいふ。即ち佛の功德を圖にあらはすものである。古來有名な大和の當麻寺にある當麻曼荼羅の如きは、阿彌陀佛を圖の中心とし、之に諸菩薩や九品往生の狀を配して成る所の極めて緻密な畫である。又眞言宗の方では金剛界の曼荼羅、胎藏界の曼荼羅といふ二通りがある、いづれも緻密な畫を以てあらはされてある。日蓮上人のは畫に依らずして、文字を以て十界が妙法蓮華經に統一せらるゝさまを書き現はされたのである。

文永八年太歳辛未九月十二日蒙御勘氣被遠流佐渡國、同十年太歳癸酉七月八日日蓮始圖之。如來現在、猶多怨嫉、況滅度後、法華弘通之者、今世有留難事、佛語不虛也。

とは上人の自ら之に讃せらるゝ所である。抑々建長五年四月安房の清澄山に於て始めて題目を唱へられてから、此に至て正に二十年である。その間有らゆる迫害に堪へて奮闘せられ、法華經の豫言を盡く御一身に於て實現せられて、開目鈔、本尊鈔の著述も既に終り、茲に於て本尊を圖顯せられた、是れ正に教義完成の時である。

二〇　日蓮上人の事蹟——六、身延の隱棲

佐渡の島に於ける生活は外見極めて寥々しいものであつたがこゝで教義を完成せられた點から考へて、上人の御生涯中こゝに意義ある

時代であつたといはなければならぬ。上人が後に自ら

法門の事は佐渡の國へ流され候ひし巳前の法門は、たゞ佛の爾前の經と思しめせ。……去文永八年九月十二日の夜、龍の口にて頭をはねられんとせし時より後、ふびんなり我につきたりし者共に、まことの事をいはざりけると思て、佐渡の國より弟子どもに內々申す法門あり。此は佛より後、迦葉阿難、龍樹天親、天台妙樂、傳教義眞等の大論師大人師は知つて而も御心の中に秘せさせ給ひし、口より外には出し給はず。其故は佛制して云く、我滅後末法に入らずば此大法いふべからずとありし故なり。日蓮は其御使にはあらざれども、其の時刻に當る上、存外に此法門をさとりぬれば、聖人の出させ給ふまでまづ序分にあら〳〵申すなり。（三澤鈔）

と記されたに依つても、佐渡時代の大切のものであることは明であら

赦免

う。

然るに佐渡の住居は凡そ三年で終り、文永十一年の春に至り幕府から赦免の狀が發せられ、道中に障りもなくて鎌倉へ歸着せられたのは三月二十六日のことである。四月八日に至り平左衞門尉が上人を幕營に招いて對面した時の有樣は次の年に至て上人の自ら記されたる所に詳である。

余に三度の高名あり、一には去にし文應元年七月十六日に、立正安國論を最明寺殿に奏したてまつりし時、宿屋入道に向て云く、禪宗と念佛宗とを失ひ給ふべしと申させ給へ、此事を御用なきならば、此一門より事起りて他國にせめられさせ給ふべし。二には去にし文永八年九月十二日申時に、平左衞門尉に向て云く、日蓮は日本國の棟梁なり予を失ふは日本國の柱橦を倒すなり。只今に自界反逆難とて同士打して、他國侵逼難とて此の國の人々他國に打殺さるゝのみならず、多くいけどりにせらるべし。建長寺壽福寺極樂寺大佛寺長樂寺等の一切の念佛禪僧等が寺塔をば燒拂ひて、彼等が頸を由井の濱にて切らずは日本國必ず亡ぶべしと申候了ぬ。第三には去年四月八日左衞門尉に語て云く、王地に生れたればば身をば隨へられたてまつるやうなりとも、心をば隨へられ奉るべからず。念佛の無間地獄、禪の天魔の所爲なる事は疑なし、殊に眞言宗が此國土の大なるわざはひにては候なり、大蒙古を調伏せん事眞言師には仰付けらるべからず、若し大事を眞言師調伏するならば、いよ〳〵急いで此國亡ぶべしと申せしかば、賴綱問て云く、いつ頃よせて候べき。予言く、經文にはいつとは見え候はねども、天の御氣色いかり少からず急に見えて候、よも今年はすごし候はじと語りたりき。此三の大事は日蓮が申したるにはあらず、

蒙古襲來の豫言

只偏に釋迦如來の御神我身に入かはらせ給ひけるにや、我身ながらも悅び身にあまる。法華經の一念三千と申す大事の法門はこれなり。

——《撰時鈔》

身延の幽居

此時の會談はこれで終つたが、更に翌五月に至り『諸宗を非難することをやめて鎌倉に止まるならば、充分の保護を加へやう』との妥協的の申出があつたけれども、固より其の志で無い故に斷然之を斥け、五月十二日を以て鎌倉を去り甲州身延の山に庵を結ばれた。

身延の山に入らるゝに就ては、此山の麓なる波木井の郷の領主なる南部實長が、萬事御世話をしたと見えて、上人は後々までも其の德を稱せられたし、しかし當時の身延の寂しかつた有樣は、上人の自ら記さるゝ所によつて推察すべきである。

富士河と申す日本第一のはやき河、北より南へ流れたり。此河は東西は高山なり、谷深く左右は大石にして高き屏風を立て竝べたるが如くなり。河の水は筒の中に强兵が矢を射出したるが如し。此の河の左右の岸をつたひ、或は河を渡り、或時は河はやく石多ければ舟破れて微塵となる。かゝる所をすぎ行きて身延の嶺と申す大山あり。東は天子の嶺、南は鷹取の嶺、西は七面の嶺、北は身延の嶺なり。高き屏風を四つ衝立たるが如し。峯に上つて見れば草木森々たり、谷に下つて尋ぬれば大石連々たり。大狼の聲山に充滿し、猨猴の鳴谷にひゞき、鹿のつま戀ふる音あはれしく、蟬のひゞきかまびすし。春の花は夏にさき、秋の菓は冬になる——《新尼御前御返事》

今でさへ身延は世と懸隔つた地である、まして六百年前の有樣は思ひやるだに痛はしいことである。

さて上人が身延へ退かれた眞意は何れに在るのであらうか。淺く之

何故の入山か

を解するものは『世の中に見切りをつけて、山中へ隱れたのである』といふが、それは、『獅子王の如くなる心をもてる』上人にはあまりに似合はしからぬことである。既に法華經の豫言が御一身に盡く實現して、此の經の末世に流布すべきこと些も疑なしと見究めのついた上は、たとへ當世に用ゐられぬとて、失望して山に入るなどいふことの有るべき筈はない。上人御自身には、

本より期せし事なれば、日本國の亡びんを助けんが爲に三度諫めんに御用ひなくば、山林に交るべきよし存ぜし故に、同五月十二日に鎌倉をいでぬ。――《光日房御書》

といひ、若くは

いかにも今は叶ふまじき世にて候へば、かゝる山中にも入りぬるなり。――《南條殿御返事》

と云つて居らるゝが果して是だけの理由であらうか。元來三たび諫めて用ゐられざれば去るといふのは、支那の臣道である。支那では君臣義を以て合ふものである故に、諫めて聽かざれば去るも可いのである。日蓮上人は『日本の柱とならむ』と誓はれし人である、如何なる事あるとも日本國を忘れ、一切衆生の身の上をよそに見らるゝ筈は無い。されば たとへ諫めて聽かれぬ故に去ると稱せらるゝとも、彼の范蠡が越を去つたり、樂毅が燕を去つたやうに、一身を潔くして國の存亡を念頭に置かぬのとは同じかるべきで無い。然るに上人はまた身延に入られた理由を述べて

常に佛禁めて言く、何なる持戒智慧高く御坐して、一切經並に法華經を進退せる人なりとも、法華經の敵を見て責め罵り國主に申さず、人を恐れて默止するならば、必ず無間大城に墮つべし。譬へば我は謀叛

を發さねども謀叛の者を知りて國主にも申さねば與同罪は彼の謀叛の者の如し。南岳大師の云く、法華經の讎を見て呵責せざる者は謗法の者なり。無間地獄の上に墮ちんと見て申さぬ大智者は、無間の底に墮ちて、彼の地獄の有らん限りは出べからず。日蓮此禁めを恐るゝ故に國中を責めて候程に、一度ならず流罪死罪に及びぬ。今は罪も消え過も脱れなんと思ひて、鎌倉を去りて此山に入て七年也。――（筒御器鈔）

靈山淨土に劣らず

とも申された。是は更に絶望の語氣で無い、更にこれを同じ身延山中に在て認められた文の、

此處は人倫を離れたる山中なり、東西南北を去りて里もなし。かゝるいと心細き幽窟なれども、教主釋尊の一大事の秘法靈鷲山にして相傳し、日蓮が肉團の胸中に秘して隱し持てり。されば日蓮が胸の間は諸佛入定の處なり、舌の上は轉法輪の所、喉は誕生の處、口中は正覺の砌なるべし。かゝる不思議なる法華經の行者の住處なれば、いかでか靈山淨土に劣るべき。法妙なるが故に人貴し、人貴きが故に所尊しと申すは是也。――（南條兵衞七郎殿御返事）

新なる活動

とあるに比べ合せて見ると、此の山住居が單に世を避くる爲の處でなかつたことは愈々明である。

然らば身延へ入られた理由は決して推測するに難くはない、即ち今までの活動に一段落をつげて、又新なる活動に入られたのである。之を農民の年中行事について比べて見ても、地を耕して種を播くのは春の事である、培ひ養ひ水を與へ草を去つて成育を助けるのは夏の事である、よく登つたのを刈り收めるのは秋の事である、之を日に當て干し乾かし、整頓して藏めるのは冬の事である。上人の事蹟について見ると立

宗までは春である、鎌倉に於ける活動は夏である、佐渡の三年は秋である。しかし是だけでは完全でない、冬に當る身延の山住居があつて終始はじめて完きを得るのである。迫害もあり諸天の加護もあり、法華經の豫言盡く實現せられて、いはゆる廣宣流布の理想の必ず虛しからざるべき確信を、上人の得られたことは既にくり返して云つたが、獨り上人自ら之を信ぜられたのみならず、今は如何なる方法を以ても此の新に興つて來た勢力を抑へつけることの出來ぬといふ事實を、何人も認めざるを得ざることになつたのである。

日本國の人々は多人なれども同體異心なれば諸事成ぜん事難し、日蓮が一類は異體同心なれば、人々少く候へども大事を成じて、一定法華經ひろまりなんと覺え候。惡は多けれども一善にかつ事なし。譬へば多くの火あつまれども一水には消えぬ、此の一門も又かくの如し。

とは斯る事實に基いた言であらう。斯くなつた上は上人自ら永く鎌倉に居て以前と同じやうに活動を續くる必要はない。是より更に永遠の計を立てなければならぬ、即ち今までの迫害にも堪へ艱苦にも堪へて、その信心をつゞけ來つた所の弟子檀那等を更に訓練し陶冶し、上人の歿後も永く此の教を承繼し發展せしむべき覺悟を固めしむることが必要である。今までの活動は多く對外的である、これ創業時代の特色として當然のことである。今よりは內部の訓練に力を用ゐて守成の計を完うしなければならぬ。この故に上人は身延に退いて靜に思ひ勤めて行じ、その諸弟子を親しく教へ導き、又筆を執つて後に遺すべき大切の教義を記述せられたのであらう。身延は隱棲の地であるが、實は以前と樣式を異にしたる大活動の地であつたのである。

今に傳はる遺文集に錄せらるゝ三百八十六篇中には眞僞の疑はしいものも少くないが、概數を見るのには此儘でも宜からうと思ふ仍て之を時代によつて分けて見ると、次の如くになる。

一、立宗前……六篇
二、立宗より越後寺泊まで凡そ十八年七ヶ月……九十八篇
三、佐渡在島凡そ二年五ヶ月……四十五篇
四、身延退隱後凡そ八年半……二百三十七篇

此の概數を見ても身延に於ける上人の努力は察するに餘あることである。此の二百餘篇の中には撰時鈔、報恩鈔の如き大部のものもあるが信者に與へて實際上の教訓を示された御書がその大部分を占めてゐる。又今までは御弟子とはなりながら御側に居て親しく教を受ける機も少かつた人達が、靜なる山住居に充分其の希望を充すことの出來た

身延草庵の生活

悦びは如何程であらうか。上人御入滅後に於ける諸弟子の盛なる活動は、その素を此の間に養ひ得たものと考へて不可は無いであらう。

前に上人が鎌倉で活動せられた時に信者となつた者の中には、上人の佐渡配流によつて其の信仰を改めたものも往々にしてあつた樣である。それは上人の御書中に

日蓮を信ずるやうなりし者共が。日蓮が斯くなれば疑を起して法華經をすつるのみならず、かへりて日蓮を教訓して我賢しと思はん僻人等が云々——《佐渡御書》

鎌倉にも御勘氣の時千が九百九十九人は墮ちて候人々も、今は世間和らぎ候かの故に悔ゆる人々も候と申すに候へども云々——新尼御前御返事》

とあるのを以ても察せられる。しかしながら斯る多くの屈折を經ても

其の信仰を改めぬものにして、始めて廣宣流布の大任を負ひ得べきである。身延の庵室へも度々來て教を聽いた者もあり、心にかけて米や麥や衣類などを送り越した者は少くなかつた。上人が此等の人に對して、

經に云く、能說此經、能持此經の人則如來の使なり。八卷一卷一品一偈の人、乃至題目を唱ふる人如來の使なり。始中終すてずして大難を通す人如來の使なり。日蓮が心は全く如來の使にはあらず、凡夫なる故なり。但し三類の三怨敵にあだまれて二度の流難にあへば如來の御使に似たり。心は三毒深く一身凡夫にて候へども、口に南無妙法蓮華經と申せば如來の使に似たり。過去を尋ぬれば不輕菩薩に似たり、現在を弔ふに加刀杖瓦石にたがふ事なし、未來は當詣道場疑ひなからん歟。これを養はせ給ふ人々は豈同居淨土の人にあらずや。——《四條金吾殿御返事》

冬の艱苦

といふやうに申し遣はされたのは、たゞに此等の人の信心を勵まさうためばかりで無く、上人御自身にも限りなき滿足を感ぜられたことであらう。

もとより佗しい山住居のことであるから、冬の盛りや夏の眞中はこと更住みにくゝ在したに違ひない。その冬のさまを記された文の中には、

去年十一月より雪降り積て、改年の正月今に絕る事なし。庵室は七尺雪は一丈、四壁は氷を壁とし軒の垂氷は道場莊嚴の瓔珞の玉に似たり、內には雪を米と積む。本より人も來らぬ上、雪深くして道塞がり問ふ人もなき處なれば、現在に八寒地獄の業を身につくのへり。生ながら佛にはならずして又寒苦鳥と申す鳥にも相似たり。頭は剃ることなければ鶉の如し、衣は氷にとぢられて鴛鴦の羽を氷の結べるが如

し。――《筒御器鈔》

とある。また夏のけしきを記された中には、

たゞなる時だにも駿河と甲斐との境は山高く河深く、石多く路せばし。いはうや當時は雨は篠をたてゝ三月に及び、河はまさりて九十月、山崩れ路ふさがりて人も通はず。――《種々物御消息》

とある。その難澁は推するに餘あることである。斯る中にも頼もしい弟子檀那の人々の熱心は更にかはらず、上人は常に

天竺國をば月氏國と申すは佛の出現し給ふべき名也、扶桑國をば日本國と申す、あに聖人出給はざらん。月は西より東に向へり、月氏の佛法の東へ流るべき相なり。日は東より西へ入る、日本の佛法の月氏へかへるべき瑞相なり。月は光あきらかならず、在世は但八年なり。日は光明月に勝れり、五五百歳の長き闇を照すべき瑞相也。――《諫暁八幡鈔》

との理想を懷いて居られた故に、斯る山中も宛ら寂光の都の如く感ぜられて、身はいかなる艱苦にあつても心は悦びに充ちて居られたのであらう。

上人が身延へ入られたのは文永十一年であるから、即ち五十三歳の時であつた。これより弘安五年即ち六十一歳の秋までは一度も山中を出られなかつたと見える。草庵は富士河の岸からタラ〳〵と爪先上りに十數町西北へ上つて、身延嶽の山懷（やまぶところ）に在つたので、今に御草庵跡の名を存してゐる。これより五十町の峻坂を攀ぢて其の嶽の頂に達するので、こゝには今に『思親閣』なるものが立つてゐる。それは上人が常に此の山頂に上つて遙に房總の地を望み、父母を思慕せられた跡であると云ひ傳へられてある。舜は五十にしてなほ父母を慕ふ、至孝であると稱せられてある。日蓮上人の如きはまことに和漢に例の無いものであら

う。その至孝の情は文永十二年(五十四歳)の二月、安房の東條氏の尼より海苔を贈られたのに對する報書の中にも現はれてゐる。

報恩鈔

今此のあまのりを見候て、よしなき心思ひ出て憂くつらし。片海、市河小湊の磯のほとりにて昔見しあまのりなり。色形あぢはひもかはらずなど我父母かはらせ給ひけんと、方ちがへなる恨めしさ、涙押へがたし。――《新尼御前御返事》

斯くも情にあつき上人である、その一たび師としたる道善房の恩をも永く忘れずに居られたのは固よりさもあるべき事である。されば建治二年の七月(上人五十八歳の時)道善房の死去を傳へ聞いて其の追善の爲にとて『報恩鈔』を撰し法華經の敎と其の末世に流布すべき次第とを委しく述べて、之を遙に房州へ送つて其の墓前に備へられた。

されば花は根にかへり、眞味は土にとゞまる、此功德は故道善房の聖靈の御身にあつまるべし。

とは其の結尾の語である。

四條金吾

師に對して斯くも懇なる上人は、その弟子に對して勿論恩愛情誼到らざる無き師であつたのである。その一例として四條金吾のことを擧げて見やう。此人は前にも云つたやうに上人が壯年の頃からの信者であつて信心年と共にまさるの狀であつたので、上人も非常に賴もしく思はれたやうである。此の金吾及び其の妻に與へられた御書は御遺文全集中にも數多く錄せられてある。

日蓮は少きより今生の祈りなし、只佛にならんと思ふばかりなり。されども殿の御事をば、ひまなく法華經釋迦佛日天に申す也。其故は法華經の命を繼ぐ人なればと思ふ也。――《四條金吾殿御返事》

との語に徵しても其の情を推すべきである。されば信仰上につきて常

に教を與へられたのみならず、其の一身上に就ても宛ら親子のやうに心を勞せられたやうである。建治三年鎌倉に龍象といふ僧があつて有識の聞え高かつたのを、日蓮上人の御弟子の大進阿闍梨日進といふのが問答して之に勝つた。それを、憤慨して龍象の徒が暴力に訴へて恥を雪がうとしたのを、四條金吾が日進を護つて其の座を去つた。龍象大に之を恨み、金吾の主家たる江馬入道に之を讒し金吾は不興を蒙つた。勿論平生から金吾を嫉む者共の助勢もあつた事と思はれる。上人之を聞いて特に金吾の爲に懇切なる訴狀を認め、その主家江馬氏へ送られた。今『賴基陳狀』として傳はるもの即ちこれである。勿論金吾その人は信仰の爲に所領を失ふとも更に後悔せぬといふ決心は固かつたのである。上人は再三書を與へて之を慰撫しまた激勵し、

賴基陳狀

一生はゆめの上、明日を期せず。いかなる乞食にはなるとも法華經に疵をつけ給ふべからず。

といふと共に、日々の注意を怠らぬやうに懇に戒め、

御寄合ひあるべからず。夜は用心きびしく夜廻の殿原かたらひて用ひ常には寄合はるべし。今度御内を出されずは、十に九は内の者ねらひなん。かまへてきたなき死すべからず。

と敎へられた。その前年六月に與へられた御書中の

たゞ世間の留難來るともとりあへ給ふべからず、賢人聖人も此事はのがれず。たゞ女房と酒うちのみて南無妙法蓮華經と唱へ給へ。苦をば苦とさとり、樂をば樂とひらき、苦樂ともに思合せて南無妙法蓮華經と打唱へ居させ給へ、これあに自受法樂にあらずや。

との敎は、斯る折に更に思ひ合されたことであらう。實に上人と四條氏との師弟の恩情は『異體同心』の活きたる敎訓である

二一、日蓮上人の事蹟——七、入滅と其の後

蒙古の來襲

日蓮上人が身延に退かれて後、蒙古との關係はいよ〳〵面倒になり、文永十一年十月には蒙古の兵壹岐對馬に寇して宗助國等戰死し、翌建治元年四月にはその使として杜世忠等が來たのを斬り、弘安二年に來た使の周福をも斬つた。そこで愈々弘安四年五月の來襲となつた。此の時上人は弟子檀那の人々に對して、左の如き御書を發せられた。

小蒙古國の人大日本國に寄せ來るの事我が門弟並に檀那等の中に若し住人に向ひ、將又自ら言語に及ぶ可からず。若し此旨に違背せば門弟を離す可き等の由、存知する所なり。此旨を以て人々に示す可く候也。

弘安四年太歳辛巳六月十六日

人々御中

いかに高潔なる心事であらう。今まで度々蒙古の來襲を豫言して、當局の人を諫められたのに、當局の人は之を用ゐず、終に此の結果であつたのである。されば上人をはじめ弟子檀那等はその豫言の適中に對して得意を感ずべきことである。然るに上人は却て弟子檀那等に警告して、此の事を得意らしく世間に吹聽することを禁じ、若し之を破れば門弟を離すといふ、嚴重なる戒めをさへ與へられた。此の心あつてこそ、『身の爲めに之を申さず、神の爲め君の爲め國の爲め一切衆生の爲めに』と公言し得られたわけである。殊に今まで蒙古のことを大蒙古と稱せられたのに、茲に至て之を改め、『小蒙古國の人大日本國に寄せ來る』と書せられたのは注意すべきことである。

小蒙古は大日本國に寄せ來て、必ず破れて歸るべきものである。上人

小蒙古と大日本

の此の御書は零細なる短篇であるけれども、斯る結末の豫言書とも見るべきものである。抑々上人は蒙古の來襲について如何なる意見をもつて居られたか、日本が滅亡すべきことを豫想して居られたか如何であるか。之については後世の人の說が一致して居ないのである。前々から上人の警告せられた所によれば、法華經を信ぜぬ國は必ず罰として外敵の襲擊を受くべきので、

蒙古國は雪山の下王のごとし、天の御使として法華經の行者をあだむ人々を罰せらるゝか。――異體同心事

とさへ明言せられた。斯れば外敵の爲に此の國が滅亡するのも據ないわけで、既に

彼の惡法の者共を御歸依ある故に一國には主なければ、梵釋日月四天の御計ひとして他國におほせつけて威して御覽あり、又法華經の行者をつかはして御諫めあるをあやめずして、彼の法師等に心をあはせて世間出世の政道をやぶり、法にすぎて法華經の御かたきにならせ給ふ。すでに時すぎぬれば此國やぶれなんとす。――《三澤鈔》

滅亡の豫想

との言さへに發せられたことである。此等の御書の趣と玆にあげた『小蒙古』の御書の語氣とは相容れぬものゝ如くに思はれる。

且又此の國が亡びた時に法華經の流布といふことは如何なるのであらうか。前に擧げた『諫曉八幡鈔』の文等によつて斷ずれば、法華經は必ず日本國に弘まり、然る後に世界に弘まるべきである。既に『觀心本尊鈔』には『一閻浮提第一の本尊此國に立つべし』と明言せられてある。されば日本國の存亡と法華經の存亡とは相伴ふべきものゝやうに見える。今法華經の必ず末世に弘まるべきことを斷言するのと、日本國の破滅を豫言するのとは明なる矛盾ではないか。此の矛盾を解かん爲には、

矛盾した

日蓮上人の胸中に立入つて考へて見るより外はない。前にもいふ通り上人の烈しい折伏は大なる慈悲心から發したものである。世人はいかに上人を疎み惡むとも、上人は世人の親たり師たる心を以て之を教へ之を戒むることを改められぬのである。子を打つ杖には親の慈愛が籠つてゐる、子がいつ迄も健かに且賢くして榮え行くことを望めばこそ、その過失を責める時には『死んでしまへ』といふやうな强い言葉をも發するのである。上人が國の破滅を叫んで世人を警めらるゝのは、國の長へに榮えんことを望むの至誠あるが故である。上人は蒙古の襲來が日本國民を警むるための痛棒であることをこそ望まれたであらうが、如何して國の滅亡を豫想されやう筈はあるまい。

大なる窮阨なくしては大なる覺醒はない、されば最も勝れたる法は大なる窮阨を經て後に其の光を發すべきである。これ法華經が末世に於て、即ち鬪諍堅固の時に於て世に弘まるべきことの豫言せられたる所以である。彼の觀心本尊鈔の文の續きを見ると斯うである、

傳教大師日本にして末法の始を記して曰く、代を語れば像の終り末の初め、地を尋ぬれば唐の東羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生、鬪諍の時なり。經に云く、猶多怨嫉、況滅度後と、此の言良に以ある也。此の釋に鬪諍の時と云々。今の自界叛逆、西海侵逼の二難を指すなり。此の時地涌千界出現して本門の釋尊の脇士となり、一閻浮提第一の本尊此國に立つべし。

即ち蒙古の西海へ來襲する時を。法華經の世界に流布すべき根柢が此國に定めらるゝ時と定められてあるのである、更に建治元年身延に於て認められたる『撰時鈔』に就て考ふる時は、此の趣意は極めて明瞭である。

撰時鈔

撰時鈔は彼の佐渡在島中の二大篇に次ぐべき重要なる著である。是は末法の時が即ち法華經の弘まるべき時節であることを明にせんが爲の著である故に、

夫れ佛法を學せん法は必ず先づ時をならふべし。

の語を以て初まつてゐる。而して佛の說かれたる種々の敎の世に行はるべき時機を考へて、

五百五歲

大集經に大覺世尊。月藏菩薩に對して未來の時を定め給へり。所謂我が滅度の後五百歲の中、解脫堅固。次の五百年には禪定堅固。次の五百年には讀誦多聞堅固。次の五百年には多造塔寺堅固。次の五百年には於我法中、鬪諍言訟、白法隱沒等云々……彼の大集經の自法隱沒の時は、第五の五百歲當世なる事は疑ひなし。但し彼の白法隱沒の次には、法華經の肝心たる南無妙法蓮華經の大白法の、一閻浮提の內に八萬の國あり、其の國々に八萬の王あり、王々ごとに臣下並に萬民までも、今日本國に彌陀稱名を四衆の口々に唱ふるが如く廣宣流布せさせ給ふべきなり。

とある。鬪諍堅固とは鬪諍をのみ專とする時代の謂である、白法とは正しき法の義である、法華經は最上のものである故に大白法といふのである。なほ此の義を詳にせん爲に、佛敎中に多くの分派を生じたる由來をのべ、支那より日本の沿革に及び、

此の傳敎の御時は像法の末、大集經の多造塔寺堅固の時なり、未だ於我法中、鬪諍言訟白法隱沒の時には當らず。

といひ、それより二百餘年後の今が正しく鬪諍堅固の時に當ることを述べて、

傳へ聞く漢土は三百六十ケ國二百六十餘州はすでに蒙古國に打破

正しくその時に當る

られぬ。……高麗六百餘國も新羅百濟等の諸國等も皆蒙古國の皇帝に攻められぬ。今の日本國の壹岐對馬並に九國のごとし。鬪諍堅固の佛語地に墮ちず、宛もこれ大海の潮の時をたがへざるが如し。是を以て案ずるに大集經の白法隱沒の時に次で、法華經の大白法の日本國並に一閻浮提に廣宣流布せん事も疑ふべからざるか。

と斷ぜられた。然る後に上人の今まで經來れる所に照して、多くの難を冒して法を弘むるの功德を語らるゝ所は、他の多くの御書と趣を同うしてゐる。

次には當時の日本に大勢力ある三宗即ち念佛、禪、眞言の敎に對して嚴しい批判を下して、

日出ぬれば星かくる、賢王來れば愚王ほろぶ、實經流布せば權經のとどまり、智人南無妙法蓮華經と唱へば愚人の此に隨はんこと影と身と

第一の瑞相

と聲と響との如くならん。

といひ、斯くも貴き經の行者を迫害し、その言を用ゐざる故に外敎の襲來あるに極れりといひ、さて後に

されば心得べし一閻浮提第一の大事を申す故に、最第一の瑞相こゝに起れり。あはれなるかなや、歎かしきかなや、日本國の人皆無間大城に墮ちむ事よ。悅ばしきかなや、樂しいかなや、不肖の身として今度心田に佛種を植えたる。今にしも見よ大蒙古國數萬艘の兵船を浮べて日本國をせめば、上一人より下萬民にいたるまで一切の佛寺、一切の神社をばなげすてゝ、各々聲をつるべて南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱へ掌を合せて助け給へ日蓮の御房、日蓮の御房とさけび候はんずるや。

と其の抱負を述べられてある。而して此の篇を結ぶに、

予が分齊として弘法大師、慈覺大師、善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏なんどを法華經の强敵なり、經文まことならば無間地獄は疑ひなしなんど申すは、裸形にして大火に入るはやすし、須彌山を手にて投げんはやすし、大石を負て大海を渡らんはやすし、日本國にして此法門を立てんは大事なるべし。靈山淨土の教主釋尊、寶淨世界の多寶佛、十方分身の諸佛、地濟千界の菩薩等、梵釋日月四天等、冥に加し顯に助け給はずば一時一日も安穩なるべしや。

諸佛の加護

の語を以てしてある。即ち諸佛等の加護を受けて此の法を弘むるものであるとの自信を述べられたのである。

此等の文によつて察するに、日蓮上人は蒙古の襲來によつて國中の人を警醒せしめんことを望まれたので、決して此の國の滅亡を豫期せられたのではないことは明である。たとへ日本國に謗法の者多くとも、

上人の眞意

日蓮上人その人は此の國をすてず、その弟子檀那また此の國に在て信心を勵む。而して此の人々の上には諸佛諸天の加護がある。前年

法華折伏破權門理の金言なれば、終に權教權門の輩を一人もなくせめ落して法王の家人となし、天下萬民諸乘一佛乘と成て、妙法獨り繁昌せん時、萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉らば、吹く風枝をならさず雨壤を、碎かず、代は、に農の世となりて今生には不祥の災難を拂ひ長生の術を得、人法共不老不死の理顯れん時を各々御覽ぜよ。現世安穩の證文疑ひあるべからざる者なり。――《如說修行鈔》

と記された所は、今も動かぬ理想である。こゝより法華經弘通の緒の開かれんことは定まつた事である。斯る國が蒙古の爲に亡ぼされやう道理はない。『小蒙古』の一語は實に『日本の柱』を以て自任せられた日蓮上人の意氣抱負を尤も明に現はしたものといふべきである。

さて身延の山住居も數年に及んで、上人の德を慕ひ來つて敎を聽く者の數も增し、今までの草庵では事足らぬやうになつたので、此の弘安四年の冬に至り新に坊を建築することになり、それが十一月末になつて落成した。これは上人入滅の前年即ち六十歲の時である。その時のさまを上人自ら記されたのがある。

新築の坊

坊は十間四面にまた庇さしてつくり上げ、二十四日に大師講並に延年、心の如くつかまつりて、二十四日の戌亥の時御所に集會して三十餘人をもつて一日經書きまいらせ、並に申酉の刻に御供養少しも事ゆゑなし。坊は地引き山づくりし候ひしに、山に二十四日一日も片時も雨ふる事なし。十一月ついたちの日、小坊つくり、馬屋つくる。八日は大坊の柱だて、九日十日葺き候了んぬ。しかるに七日は大雨、八日九日十日はくもりて、しかも暖なること春の終りのごとし。十一日より十四日までは大雨ふり大雪ふりて、今に里に消えず。山は一丈二丈雪氷りて、かたき事金の如し。二十三日四日は又空はれて寒からず、人のまいる事洛中鎌倉の町の申酉の時のごとし。――《地引御書》

病氣

之を以て見ると大小の坊及び廐等もあり、稍規模の大きなものであつたと見える。又その落成後人の夥しく來たことも記され、賑々しい有樣も想像される。

斯く新しい坊も出來て、これよりは稍安樂に過させらるべきであつたに、痛はしいことには此の時分上人は既に病にかゝつて居られたので、それが翌年までも癒えずして、終に池上に於ける御入滅となつたものと察せられる。それは同じ年の十二月に上野殿母尼への御消息によつて知れるのである。即ち

この所のやう前々申しふり候ひぬ。さては去る文永十一年六月十七

日この山に入り候て、今年十二月八日に至るまで、此の山出る事一歩も候はず。たゞし八年が間、病と申し齡と申し、年々に身弱く心耄れ候ひつるほどに、今年は春よりこの病おこりて、秋すぎ冬に至るまで日日に衰へ夜々にまさり候ひつるが、この十餘日はすでに食も殆ど止まりて候上、大雪はさかんなり寒はせめ候。身のひゆる事石のごとし、胸のつめたき事氷のごとし。

とあり、次にその子の死んだのを悼んで、

日蓮は所勞の故に人々の御文の御返事も申さず候ひつるに、この事はあまり歎かしく候へば筆をとりて候ぞ。

とある。以て其の病狀の輕からぬものであつたことを推すべきである。

此の次の年のことは明には分らぬが、その秋までに認められた御書の例年に比べて非常に少いのを以て察するに、はか〴〵しく回復はされなかつたものであらう。さて此の年の九月に至り、常陸の溫泉へ行つて病を養はうと決心せられ、九年目で身延の山の外へ出られた。波木井の實長は此時も例によつて懇に御世話をして、態々其の愛馬に上人を乘せ、且其の子を上人に附添はして御送り申さしたのである。そこで九月八日に身延を發し駿河相摸を經て、十八日に武藏國池上へつき、池上宗仲の家へ入られた。多分はこゝで暫く御身を休めて、更に常陸へ向はれる豫定であつたのであらうが、衰弱甚しくして終にその豫定は空に歸してしまつたのである。池上へついて翌日波木井殿への御消息には、

畏み申候。道の程別事候はで池上までつきて候。道の間、山と申し河と申し、そこばく大事にて候ひけるを、公達に守護せられまいらせ候て、難もなくこれまでつきて候事、恐入り候ながら悅び存じ候。さてはやがて歸り參り候はんずる道にて候へども、所勞の身にて候へば不定

の事も候はんずらん。さりながらも日本國にそこばく持てあつかうて候身を九年まで御歸依候ひぬる御心ざし申すばかり無く候へば、いづくにて死候とも墓は身延澤にせさせ候べく候。

栗鹿毛

とある。なほ此處まで乘つて來られた栗鹿毛の馬の事に及び、これを常陸まで連れ行くは途中が痛はしい故に上總の藻原殿にあづけて置くつもりであるといひ、それも知らぬ者に世話さすのは不便ゆゑ、身延から附いて來た舍人（とねり）を止め置いて世話をさせたいと申送られた。御自身の病の重體である中に馬をまで斯く痛はられた御心の優しさには、實長も感涙を流したことであらう。此の時の馬の鞍は今も藻原寺に所藏せられてある。

入滅

斯くて上人の病は月を越えて愈々すゝみ、今は回復の望みも無くなつたので、報によつて馳せ集つた門弟等に『身命を惜まずして弘通の大任を果すべきよし』を懇に遺言し、又特に十四歳の少年なる經一麿呂を招いて、他日京都へ上つて法を弘むべきことを命ぜられた。經一麿呂は後に日像といひ、二十六歳にして京都へ上り師の遺命を完うしたのである。今は心に殘る所も無く。この年弘安五年十月十三日、六十一歳の壽を以て入滅せられた。荼毘に附した遺骨は遺命の如く身延山に葬られた。

六老僧

御弟子中の重なものを世に六老僧といふ。上人御入滅の時、日昭は六十三歳、日朗は四十歳、日興は三十七歳、日向は三十歳、日頂は三十一歳、日持は三十三歳であつた。此等の人々をはじめ、多くの弟子檀那力を戮せて遺命を守り、上人滅後もよく宗勢を維持し得た功は偉大といはなければならぬ。日蓮上人が身延に於て親しく弟子の爲に講ぜられた所を日興が筆錄したのを『御義口傳』といひ、日向が筆錄したのを『日向記』

といひ、共に今に傳はつてゐる。又日持は『日は東より西へ入る、日本の佛法の月氏へかへるべき瑞相なり』といふ師の言に從ひ、海外へ教を弘めやうと志し、永仁三年四十六歳にして蝦夷を經て北へ向つたが終る所は分らぬ。その事蹟の傳はらぬは遺憾の至であるが、その壯烈なる志は永く仰ぐべきものである。

日興上人に就ての傳記

こゝに問題とすべきは日興の事蹟に就てゞある。此人は師の滅後富士山南麓の地方に教を弘め、大石寺及び本門寺を創め、他日此の地に戒壇を立つべき基礎となし、その功勳は、まことに偉大である。然るに其の身延を去つて富士へ赴いたについては彼の波木井の領主なる南部實長その他の人と意見を異にし、斷然こゝを去つて自ら一派を開いたのだといふ傳說がある。それで後年に及んでは富士派といふものと身延とは宛ら仇讎の如くになり、身延からは富士を異端の如くに見做し、富士からは身延へ詣る者は無間地獄へ墜ちるといふ事さへ言つた。しかし余等の考へでは此の傳說が全く信を措き難いものだと思ふ。たとへ日興と實長等の間に多少の意見の行違ひがあつたとしても、之が爲に乖離を來すなどゝいふことは無かるべき筈である。日興が富士へ赴いたのは、全く其の教を弘める爲といふより他意は無かつたのが、後に至つて種々の傳說が附會されたものであらう。日蓮上人の御弟子達は師を尊信すること極めて篤かつたものである。彼の十四歳の少年經一麻呂が特に大任を命ぜられたのを、六老僧はじめ先輩の人々に一人として異議を挾む者は無かつた樣である。斯る御弟子達が

水魚の思

總じて、日蓮が弟子檀那等自佗彼此の心なく水魚の思を成して、異體同心にして南無妙法蓮華經と唱へ奉る處を生死一大事の血脈とはいふ也。然も今日蓮が弘通する處の所詮是也、若し然らば廣宣流布の

大願も叶ふ可き者歟。剰へ日蓮が弟子の中に異體異心の者これ有れば例せば城者として城を破るが如し。――《生死一大事血脈鈔》

といふ師の御趣意を外にして、師の滅後幾くも無く不和を生じたといふは到底信じられぬことである。

上人入滅の後年を追うて宗門の發展したのは事實である、それは上人の遺されたる感化も無論であるが、一には多くの御弟子が水魚の思を成して相補け相勵まし、誠意を以て弘通に盡した爲と思はれる。その美しい事蹟に汚點を印するやうな傳說は早く葬つてしまふ方が宜い、

二二、日蓮上人の遺風

日蓮上人を日蓮宗といふ一宗の祖師と思つてはならぬ。世に傳はる高僧とか碩德とかいふ人々の傳記に有りふれた事實を集めて上人の

偉大なる日蓮上人

上人の遺文と筆蹟

事蹟を修飾し、それで光彩を增したと思つてはならぬ。日蓮上人の偉大なるは雲に聳ゆる山の如く、空を浸す海の如くである。その山を寫すに四條派の巧緻なる筆を以てし其の海を寫すに土佐派の豐麗なる色彩を以てしても、實景と遠ざかるばかりである。雪舟の豪爽なる筆致によるか、光琳の雄大なる意匠によつて、はじめて其の一端を現はし得べきである。上人を讃せんとして試みられた後の人の工夫は大概失敗に終つてゐる。

吾々がいかに言を費しても到底何の力も無い、上人の偉大なのを知らうとする者は、直ちに上人の遺文に就いて其の靈感を受くるが宜いのである。又上人の筆蹟にして今に傳はつたものも少くない。下總中山の法華經寺の如きは、上人の遺墨を多く所藏する點に於て日本一であらうが、なほその外にも傳はつたものが少からずある。古來の高僧中に